
ハツコイ ～姫 SIDE～

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハツコイ 姫 SIDE

【Nコード】

N3833K

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

ケータイアプリの恋愛シュミレーションゲーム「恋する私の王子様」の二次創作（FF）です。

ゲームの中では、主人公の女の子が6人の王子様候補の中から1人の王子様を選択して、「永遠の初恋」を楽しむものです。

今回は、主人公と先生の場合。特に主人公の女の子サイドのお話で展開してゆきます。

FF小説抜きに、一つの先生と生徒という関係のラブストーリー

としても読めるようになってます。
す）（たぶん、そのように書いてま

第1話：転校（前書き）

もう一つの『初恋』の姫バージョンです。「先生×姫」の数ある中の一つとってください。

第1話：転校

新学期。

っと言っても桜は散ってしまつて、もう4月も半ば。

夕べはドキドキして眠れなかった。

新しい学校に転校してから、早速入院。

そんなスタートだったから、クラスメイトの反応が気になって仕方がなかった。

朝学校に着くと、先ず職員室に行つて担任の先生である蔵前先生を探した。

まあ、探すと言つても名前と男の人って事しか知らなくて、顔も声も分からない。

近くを通り過ぎた年輩の女性の先生に尋ねた。

廊下で待つ私に、長身で細身の男の人が近づいてきた。

なにげに目が合った瞬間、息が止まつて身体が固まつた。

周りの音が聞こえなくなった。

何て表現したらいいのか分からないけど、とにかく今まで出逢った人と違う感覚が身体を襲つた。

「おはよう。私が蔵前だが、君が滝澤さん？」

優しい笑みとともに声をかけてくれたその男の人こそが、探していた蔵前先生だった。

先生は、明るめの髪に良く似合う、細身のチャコールグレーのスーツに、細いフレームのメガネをかけていた。

私がイメージする学校の先生像とは、かけ離れた紳士的な人だった。そう、初めて見た蔵前先生のイメージは、西洋文学の中の若き優し

い男爵って感じだった。

「あっ、はい。おはようございます！

滝澤 姫と言います。今日から宜しくお願いします！」

深々とお辞儀をした私を見て、先生は右手の握りこぶしを口元にあててクククツと小さく笑った。

何か可笑しいこと言っちゃったかな？ 髪型ヘンだった？ 色々と頭の中でグルグルと考えちゃった。

「ああ、おはよう。こちらこそ、宜しく。君は運動部希望かい？
朝から元気がいいね。」

思ってもいない事を言われたので、途端に私は恥ずかしくなってしまうた。

自分ではそれほど気にせず、キチンとしなきゃ！って思って挨拶したものだから。

そんなに大きな声だったのかな？

たぶん顔が真っ赤になって、耳まで赤くなってる、絶対。

新しい学校。

新しい制服。

新しい靴。

新しい景色。

少し眩しいくらいの朝。

なんとか私の新しい学校での第一日目が始まり、楽しい学校生活がスタートした。

クラスメイトには、幼なじみのバカレンこと町田 蓮もいた。でも、高校になってもバカレンはやっぱりバカレンだわあ。

なんかこう、明るくて人気者でお調子者っぽいけど、周りを見ていてムードメーカーって感じ。

まあ、おかげで私の緊張も、気が付いたら何処へやらって感じだった。

しかも！ 初日なのに友達が出来たのは、悔しいけどバカレンのおかげだもんなあ。

蓮の親友、爽やかサッカー少年の仙川ヒロトくん。

それから、名前の順で私の前の席だった、色々趣味が合う高木友子ちゃん。

不思議なお嬢様って感じだけど、色々教えてくれた大塚ユリさん。

夕べ、気になってドキドキしていたのが可笑しく思えるほど、このクラスが大好きになれそうな予感。

帰りのH Rが終わると真っ先に蓮の席のところに行った。

一言お礼が言いたかったから。

「蓮。今日は、ありがとう。」

「はっ？ どうしたんだ姫。何かしたか？」

頭の上にハテナがたくさん飛んでいるみたいな顔した蓮。

「いいの！ 私がお礼を言いたかったんだから！

じゃあね、また明日からも宜しくねえ！」

せっかくお礼を言ってあげたのに、蓮ったらホントに分かってないんだかどうなんだか？

なんだかこっちが恥ずかしくなっちゃって、慌てて教室を出て来ちゃった。

勢いで教室を出たけど、その後、階段を足早に駆け降りていると、蔵前先生に呼ばれていることを思い出した。

それにママから入院した事での色々な手続きの書類を預かっていたのも思い出し、職員室に向かった。

だけど、向かったのはいいが困った。

今、自分が学校の中の何処にいるのか分からない。

職員室はどっちに行ったらいいか分からない。

周りを見渡しながら、トコトコと歩いていた。

「滝澤さん！ 滝澤さん！」

誰かに呼ばれた。

っていうかこの声って担任の蔵前先生じゃない？って思って振り返った。

「先生。今、先生のところに行こうと思ってたんです。それで職員室を探してたら迷子になってしまっ……。」

言っただけいいけど、校内で迷っていた事を言葉にしたら急に恥ずかしくなっちゃって、最後は口ごもっちゃった。

そんな私を優しく笑顔で迎えてくれた先生。

少し傾きかけた午後の日差しがメガネに反射して、男の人なのに、キラキラして綺麗だなあって思っちゃった。

「ハッハッハ。そういう事だったのか。

確かに今日初めてだったからな。

私もキチンと説明してあげずにいたし、悪かった。すまない。」

先生は、そう言って軽く頭を下げた。

それからその近くにある地学準備室に向かった。

いつもは職員室ではなく、この地学準備室にいるらしい。

部活動、委員会、学校内の施設の使用に対しての諸注意など色々と教えてもらった。

もちろんママから預かっていた書類もちゃんと手渡し出来た。これでやっと帰れる。

さてと、昇降口。

私は、今さっき先生からもらった校内の全体案内図を広げた。

何かが変り始めて、何かが始まる予感。

中庭で、咲いたばかりの姫林檎の花が春の夕暮れの風に揺れていた。

第2話：緊張

新しい学校にも慣れた。

遅れたスタートも気にならないほどクラスも楽しく過ごしていた。

ある日、私に初めての日直が回ってきた。

遅れた分のハンディとして、回ってる日直が一巡したら私がやるように蔵前センセはしてくれた。

だから、そろそろ梅雨入りっていう時期に初めての日直。

みんな下校したり部活に行ったりで、誰もいない静かな教室。

今日一日を朝から振り返りながら書いた。

でも、後でこれをセンセが読むんだなあって考えちゃったら緊張してきた。

書いては消して、書いては消してを繰り返していた。

時間はどんどん過ぎていくし、焦って余計に上手く書けない。

雨上がりの澄んだ気持ちのよい空気が廊下を吹き抜ける。

ゆっくり、ゆっくりと地学準備室へ向かって歩く。

扉の前に立つと、深呼吸を3回してから目をつぶったまま、ゆっくりと2回ノックをした。

「センセ……いらっしゃいますか？ 滝澤です。」

自分の名前を言い終えると目を開けた。

すると、部屋の中から静かに低めな優しい声が聞こえた。

「どうぞ、鍵は空いているから、入ってきなさい。」

「しっ、失礼します。」

緊張のあまり、言葉を詰まらせてしまった。

そおつと扉を開けると、挨拶とともにペコリとお辞儀をして入っていった。

トコトコ。 トコトコ。

右手にバッグを提げて、左手で日誌を抱えながら、センセの机まで歩く。

一歩。また一歩。

初めてこの準備室に入った時は気づかなかったけど、縦に長い部屋だな。なんて思ってみたり。

煙草の匂いと何か香ばしい匂いでいっぱい部屋だなあ。なんて思っていたりしていた。

「はい。センセ。今日の日誌書けました。」

やっとの事で書き上げた日誌を差出した。

大きなガッチリとした手で、サツと受け取りページをめくり始めた。

「ああ、今日一日ご苦労さま。」

私自身、センセの言葉よりも自分が書いた部分が気になってしまつて、つい覗き込むように見てしまった。

「ん？ どうかしたかい？」

おもいっきり怪しまれてるって、私。

日誌ばかりに気を取られて気付かなかった。顔だってこんなに近く
になってるし!!

「えっ!?　　いいいえ。何でもありません。　ただ。」

「ん?　　ただ?　　ただ何か気になることでも?」

動揺しまくってる私に優しく聞き返してくれるセンセ。

ああ、もう隠しきれない!　　って思う頭とは裏腹に私の口が勝手に
どんだんしゃべってく。

止まらない私の口。

「はい。ただ、自分が書いたものって、改めて読むと恥ずかしかつ
たりするから。

目の前でセンセに読まれてドキドキしちゃって。／／／／／

もう恥ずかしくって笑うしかないって感じ。俯きながら笑ってごま
かした。

だって、私は立ったままだけど、センセは椅子に座ったままなのに、
目線の高さがさほど変わらないの。

そんな近い位置で見られたら、ドキドキしない方がおかしい。

でも、そんな私の気持ちなんて知らないセンセは、爽やかな笑顔で
答えてくれた。

「なるほど。そういうことだったのか。

確かに人はそう感じる事はあるが、私など職業柄、常に自分の言葉
でみなに物事を教えている。

時にはそれをプリントというカタチで何枚も印刷し、配っているか
ら麻痺してしまっているんだろうね。

そういう気持ちは大事にした方がいい。そして、ありがとう。」

確かにいつも真剣な顔をして、っというより何だか難しい顔して書き物をしてるイメージ。

「そうですね。センスはいつも難しそうな顔をして何かを書いてるって感じがします。

でも、何で？ 何で”ありがとうございます”なんですか？」

不思議だなあ。いつもなら思っているだけで、口になんて出来ないのに、今日はこんなにもセンスとフツーに話が出来てる。

「あつ。ああ、それはだねえ。

姫くんが、そういう人間として大事な気持ちを思い出させてくれたことに、礼を言っただよ。

っがしかし、私は普段からそんなに難しい顔をしているかね？」

「えっ！？ いえ、そんなこと無いです！ っっていうか、そのお。」

ヤバッ！ 調子に乗り過ぎて思っていた事しゃべりすぎちゃった。

ああ、どうしよう。絶対バレてるよお。

もうごまかしようがないよ。

そんな風に思っていると、センスは椅子からスッと立ち上がり、私とは反対の左側から机を回り込んで、準備室内の水場へ向かった。

「ハッハッハッ。いいんだよ、姫くん。実に素直でいいと思うよ。

そうだ、時間が許すようなら、お礼に珈琲を淹れよう。一杯付き合っってくれるかい？」

「はい。ありがとうございます。」

こんな事ってアリ？

今日はなんだかツイてる！？

「じゃあ、こっちのソファにかけて待っていなさい。直に出来上がるから。」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

準備室の水場で、慣れた手つきで珈琲を淹れている。

ウチでは見たことのない器具を使ってる。

まるで理科の実験で使う器具のようなものを使って淹れていた。

「砂糖とミルクは入れるかい？」

「ありがとうございます。じゃあお砂糖1つと、ミルクはたっぷりめで。」

「はい。かしこまりました。お姫様、では。」

「いっいまお姫様って言った？！確かに小さい時から名前をからかう様に「お姫様」って言われたことはあったけど、こんな風に優しい響きで言われたことなんて一度もないからドキツとしちゃった。大きな手だなあ、やっぱり大人の男の人の手だよ。」

そんな手で器用にお砂糖やミルクを入れて、スプーンでクルクルと混ぜるところまでやってくれちゃった。

私はただただその光景を固まったまま見つめているだけだった。

「熱いから気をつけて飲みなさい。」

大きな手でマグカップを持ちながら私の左側に腰を下ろしたセンセ。にこやかに促すけど、まるで小さな子供に話すよう。

まあ、センセに比べたら私はまだまだ子供かな？　ちょっと寂しく感じた。

「つつ！　ゴクン。うわあ、美味しいです！　お店屋さんみたいな味ですねえ。」

「そうか。良かった。姫くんの口にあって嬉しい。」

そういつて何も入れないままの珈琲をセンセは美味しそうに飲んでいた。

私は横目でチラリと見ながら、ちよびちよびと飲んでいた。

今日は一杯緊張したから体が固まりすぎちゃった様だったけど、センセの温かくて美味しいコーヒーが、固まりすぎた私の体をじんわりとほぐしていつてくれる様に感じた。

第3話…私服

休み時間は、たいてい前の席の友ちゃんこと友子とのおしゃべり。何かと趣味の合う彼女とは、初めから会話が盛り上がった。

例えば、好きなアイドルグループPRINCEの話になると止まらない。

二人ともヴォーカルでリーダーの朝霞 璃鈴のファン。

流れるような紫の髪と瞳

いつも爽やかでいて、麗しい姿、もうカッコ良すぎる！！

お互い持っているグッズは何かとか、今度のコンサートの話とかホント話は尽きない。

「ねえ、姫ちゃん。今度の土曜日って空いてる？ 先月出来たイーストモールに行こうかな？ って思うんだけど、一緒に行かない？」
チャイムが鳴って、礼が済むと早速後ろを向いてきた友ちゃんが話しかけてきた。

「えっ、いいよ。私、最初は混んでるかな？ って思ってたってないの。そろそろ行きたいな。って思ってたし。」

最近話題のスイーツのお店や気になるブランドのブティックなんかも入ってる複合型ショッピングモールが、大きな工場跡地にオープンしていた。

電車で2つ目の駅で、改札を抜けると広場のような所に出る。

テレビでも紹介されたり、雑誌にも載るほどの話題のスポットだ。

私服で友ちゃんと会うのは初めてだけど、どんな服着て行こうかな？
なんて毎日悩んでいたら、あっという間に週末はやってきてしまっ

た。

梅雨も明けて、陽射しがかなり強くなってきた。すっかりUVケアしていかなくちゃ。

日傘にしようかな？ でも、ショッピングモールの中では邪魔になるし。

ピンクのレースを張ったつば広帽子のキャプリンをかぶって、それにベビーピンクのニットカーデを羽織って行こう。

えーっと、中はクリームの地にワインカラーの小花柄のワンピース。

ちよっとお嬢様風ってところかな？

ああ、これがカッコイイ彼女とのデートだったらなあなんて思ってみたりもしたけど、そんな相手もない私にとっては、夢のようなお話だわ。

週末のショッピングモールは、たくさんの人。だけど、ちよっとはブラブラと出来るくらいの余裕はあるかな？

友ちゃんも私も、なんだかんだで色々と買っちゃって両手にはたくさん荷物。

かなりの出費。次のお小遣いまでの1週間くらいは大人しく過ごすことにしようっと。

「さっき、姫ちゃんが買ったワンピース、今日のカーデとも似合いそうだよね。」

「黒だし、カットとかちよっと大人っぽいかな？ って思ったんだけどね。チャレンジしすぎたかな？」

ホルターネックの黒いワンピースを買った。

白い小花柄のちよっとレトロっぽくて、デザイン的に大人っぽく感じた。

「そんなことないと思うよ。重ね着したり、今日のカーデと合わせたら可愛いと思うよ。」

いつも休み時間とか、お互いのファッション雑誌を眺めながら話しているけど、友ちゃんのセンスは懂れちゃうくらい。

だから、自分で気付かなかった組み合わせなども聞けて、友ちゃんの意見はとっても貴重だったりする。

「ありがとね。じゃあ、今度はそれで出掛けてみようっと。楽しみ」
♪

しばらくウィンドウショッピングを楽しんだ。

たくさん歩いて喉もカラカラ。

通りの先に見つけた、オシヤレな喫茶店に入った。

涼しげな琥珀色のアイステイーを並べて向かい合いながら、二人で今日見て歩いたお店の感想をしゃべりまくっていた。

そこへ、友ちゃんのケータイがバイブと共に光った。

「姫ちゃん、ゴメン！ 私、先に出るわ。彼がバイト早く上がったからって。今日は楽しかったね、また今度来ようね。」

そう言いながら、そそくさと身支度を始めた。

そっかあ、彼氏か。そう言えば春にバイトの先輩と付き合い始めたって言ってたなあ。

友ちゃんは、テーブルの伝票脇にアイステイーの代金として100円玉を3枚置くと、おつりはいいわ。と言って颯爽と店を出て行った。

呆氣にとられながら彼女を見送ると、ポツンと残された気分を変えようと、ちょっと変った名前のブレンド珈琲を注文した。

白い厚手のカップの珈琲が運ばれてきた時、長身の男性客が店に入

ってきた。

髪は自然に下ろしているしカジュアルだけど、どこことなく蔵前センセに似ているな。っと思った。

一度気になると、ついつい視線はカウンターに座るその人を見つめている自分に気付く。

そうこうしていると、その男性は隣の女性と口論になって、女の方が怒って店を出て行ってしまった。

見てはいけない場面を見てしまったかな？と思って、慌ててテーブルの珈琲へ視線を落とすと、視界で男性が席を立つのが分かった。しかも、その男性客はこちらに近づいてくる。えゝ？ 見ちゃいけない現場を見ちゃったから？

第4話…イザナギ

視界の隅では、男性が近づいてくるのが、スローモーションのように感じた。

そして私は、直視出来ずに両手でコーヒーカップを包み込み、そっと珈琲を飲んだ。

心臓はバクバクしていたけど、珈琲を口に含んだ瞬間、懐かしきみたいな気持ちと胸の奥が熱くなるのを感じた。

「姫くん。一人でお茶かい？」

「センセ！？ うそ！ あっ、はっはい。」

似ているとは思っていたものの、まさかこの人が本当に蔵前センセだとは思わなかったので、つい言葉に出てしまった。

「ハッハッハ。大丈夫かね？ 驚かせてしまったかい、すまなかった。」

「いいえ。 はい。」

っていうか私、何言ってるんだか訳分らないし。ヤダなあ。

そんな事思ってる目の前で、右手の握りこぶしを口元に当ててクククツと笑いをこらえているセンセ。

また笑われちゃったよお。

「あっ、今日は、友ちゃんっじゃなくて、高木さんと買い物に来たんですが、用事が出来てさっき帰ってしまったんです。」

センセは立ったままニコリと私に笑いかけながら言った。

「姫くん、ここに一緒してもいいかい？」

「はい。どうぞ。すみません。」

慌ててテーブルの上の少し散らかったストロー袋などを片付けた。

「それで、君は何を注文したのかな。」

「えっと、確かちょっと変わった名前のブレンド珈琲で、……イザナギ！　そうイザナギです。」

変わった名前だったけど、日本の神話に出てきたなあって思ったから覚えていた。

それにしても、こういうシュチュエーションって恋人同士っぽくない？

先に来ていた彼女の席に、彼氏が後から来て座るって感じ。

ああ、こんな風になるなら私、もっと可愛い格好して来れば良かったよ。

「ほお、イザナギか。では私も同じものを頂こう。」

スラリとした長い腕を伸ばし、近くのウェイターを呼び止めて同じものを注文した。

肩幅が広くて、細長い指にがちりとした手。いつもなら全て後ろに流している髪。

やっぱりカッコイイよなあ。憧れちゃうよ。

「うわぁ、お揃いですね。」

大した事ではなかったんだけど、心がくすぐったいような、なんだか嬉しくなって言ってしまった。

センセは、“お揃い”って言葉にちょっと恥ずかしそうにしていた。けど、すぐにいつもの優しい笑顔になって、珈琲の事を教えてくれた。

「お揃い、か。そうだな、お揃いだな。そう、このイザナギは、実は私独自のブレンドなんだ。」

「えー、本当ですか？　もしかしたら準備室で頂いた珈琲ですね。だから一口含んだ瞬間に、もしかしたら以前に飲んだかも？　って思ったんですね。とっても美味しくて大好きです、この珈琲。それに、今日のセンス、髪、下ろしてるんですね。髪型もこっちの方が好きです。私。」

視線を感じる。やっぱり恋人同士に見えるのかな。

意識しちゃうと余計に緊張してドキドキしちゃうよ。

そうだよね、センスは居るだけで目立つもん。

こんなオシャレな喫茶店でくつろぐ姿なんて絵になっちゃうし。

いつもはスーツだけど、カジュアルな服装もいいな。

ダンガリーシャツにチノパン。組んだ長い足がテーブルの脇へ少し伸びている。

運ばれてきた珈琲を、やはり何も入れずにブラックのまま口にして
いる。

「そうか。姫くんはこちらの方が好きか。ありがとう。今日は急な用事で急いで出てきてしまったからな。」

あつ、センス、可愛い。ちょっと赤くなってる。

外を見たのは、絶対照れ隠しにだわ、きっと。

っていうか、そうだ。さっきの女の人、気になるな。

「あつ、そうだ。センス。ごめんなさい。あの、そのお、昨日は授業中ぼんやりしていて。」

「君は本当に素直ないい子だ。」

うっ、やっぱり取り繕ったの完全にバレてるよお。かと言ってもう仕方ないし。

見ちゃった事も、謝った事も、取り消すことは出来ない。

何か違う話題探さないと。どうしようかなあ。

所在なさげだった私を見かねてか、少し寂しそうな辛そうな瞳をしたセンセは、センセらしい喩えで和らげてくれた。

「大丈夫だ。安心しなさい。君が見たことは真実の一端かもしれないが、かといって全てではない。ある一つの星を観たところで、それがどんな星座をなす星なのかは分からない。そういうことだ。」

「はい。ありがとうございます、センセ。」

友ちゃんには申し訳なくて悪いけど、一人の時にセンセと会えて、今日は良かった。

すごい現場を見ちゃったり、さっきの女の人の事は気になる。そして、少し照れたセンセ、時々寂しそうな瞳をするセンセ、髪を下ろしているセンセ。何だか色々な特別なセンセを発見できたことが嬉しい。

第5話：秘密

朝から陽射しが強かった。

夏服とはいえ、制服がおもりの様に感じるほど身体にまとわりつく。3日間続いた今日までの定期テストが終われば、楽しい楽しい夏休み！

連日のテスト勉強での寝不足と、苦手な数字との格闘で頭痛がする。しかし、この頭痛も、1時間後の私からしてみれば、大した事なかった。

「友ちゃん、おはよう。」

いつものように教室にいる生徒はパラパラいる程度。

電車通学の友ちゃんはいつもと同じ電車に乗ってくるため、私よりいつも早く教室に着いている。

普段通りと思っていたのは私だけみたいだった。

「姫ちゃん！ 私にナイショにしてることない？」

私の顔を見るなり友ちゃんが突進してくるようになってきた。

しかもニヤニヤとして、小声で耳元で囁いてきた。絶対怪しいって。

「えっ、何もないよお。朝からいきなりどうしたの？」

「どうもこうもないわよお。水臭いじゃない。彼氏が出来たら真っ先に教えてくれると思ってたのにい。姫ちゃんったら隠してたでしょう。」

「はあ？ 何それ、いないって。どこから聞いてきたの。」

ホントに、私には寝耳に水で、分からないことだったから驚いてしまった。つい大きな声を出してしまった。

せっかく丸暗記してきた古典の活用表もすっ飛んでしまうくらいの勢いだっただ。

「シィ。隠してもダメだって。後輩が見たのよ。まあ、今日のテストが終わったら一緒に帰ろう！ ゆっくりじっくり聞かせてもらうからね、覚悟しておきなさいね。」

ヤバイ。完全に誤解してるよ。

後輩が見間違えたんだって、きつと。

ああ、頭痛が悪化してきた。

あきらめて数学の公式でも見ておくか。

結局、ただでさえ苦手な数学なのに、すっかり友ちゃんのおかげで惨敗だった。

おまけに古典の活用表も微妙だし。

ああ、せっかくの私のお小遣い値上げ計画はどうなるのよお。プチンと花壇のハウセンカの種がはじけた。

空は快晴。

テスト明けでグラウンドでは、早速野球部が練習を再開して、みんなで声を出しての走り込みをしていた。

本当ならば、私だってテストが終わって開放感たっぷり、明日からはテスト休み！ 答案返しまでの数日間はパラダイスだった。

私だけは、どんより重い空模様。

今日から時間はたっぷりあるんだからっていうことで、私のウチに来て話す事になった。

もちろん濡れ衣なんだもの、ほとんど隠し事なんてしてないから堂

々としていればいいんだけどね。

ただ一つだけ。

そう、一つだけ気にかかる事はある。

それさえなければドキドキもしなかった。

頭痛も悪化しなかったのかも。

私の部屋に来るなり威勢のいい友ちゃんは、まるで芸能リポーター
ばりの口調と興味本位っぽい表情で質問攻めの嵐だった。

「喫茶店でいい雰囲気だったらいいけど、相手はどこの誰」

「大人の男性みたいだけど、いくつ」

「いつから付き合ってるの」

もう矢継ぎ早に質問してくるものだから、イエスもノーも言えない
くらい。

しかも、たった一つの気掛かりに見事命中していた。

当然、私はしどろもどろになってしまった。

そんな私を見て、余計に面白おかしく話を仕立てて囃し立てた。

相手は彼氏でも何でもなくて、私達の担任でもある蔵前センセだから、
本当の事を話してもいいんだろうけど、私の中で何かがざわめ
いた。

謎の女性との口論、寂しげな瞳。

思い出すだけで胸がキューっとする感覚になる。

やはり、たとえば友ちゃんでも話せない。っと思った。

また、休日のカジュアルな格好。

なんと言っても髪を下ろしているセンセ。

こんな特別なセンセを知っているのは私だけだもん。

そんな黒く濁った何かが、優越感みたいに込み上げてきていたのも

確かにあった。

友ちゃん情報では、確実にあの日の私の服装と一致していた。時間的にも、窓際の席っていうことも、私だっていることを否定する材料はなかった。

困った挙げ句、断片的に話す事にした。

彼氏じゃないけど、憧れている人。

たまたま友ちゃんと入れ違いに、他の人と店に来たってこと。

いつかは必ず一番先に友ちゃんに話すから、っていう条件で、今はまだ話せない事情がある事。

などなど直接センセに結びつく事は避けて話した。

納得いかないリポーター友ちゃんは、今度イーストモールで美味しいスイーツをご馳走するってことで、しぶしぶ了解してくれた。

ああ、代償が高くていたわ。

あとはセンセにも話しておかないと。

でも、しばらくは学校ないし、どうしようかな。

その晩、ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。

色々気になる事や心配な事を考えてた。

行き着いた考えは、明日なら部活動に来る生徒だけだから、伝えられるかも。ってこと。

昼過ぎに準備室で一人、センセが来るのを待つ。

多分少し席を外しているだけなのかも。

鍵が開いていたし。

たくさんの書物の並ぶ書棚に、一枚のたくさん流れ星が写っている写真を見つけた。

小さい頃、星座の本で見たような流れ星が、一筋ではなくて、たくさん降っているように写っていた。

第6話：真実

流れ星のパネルを、そつと両手で持ち上げて、ソファーに腰掛けながら眺めていた。

どのくらい眺めていただろう。

センセが、準備室に入ってくる扉を開けた音で我にかえった。

「姫くん？」

「あつ、センセ。お留守の間に入ってごめんなさい。

ちよつとお話したら直ぐに帰りますから。」

ゆつくり立ち上がり、パネルを元あった棚に戻した。

センセは自分の机に荷物を置くと、タバコに火をつけ、その場からパネルを見つめ話し始めた。

「その写真は、私が学生時代に撮ったものなんだ。

今では、そこにあった事すら忘れてしまうほどだったがね。

天体写真は、他にもいくつも撮ったが、やはりオルフェウス流星群が一番かな。」

センセは喫茶店で見せた、あの時と同じ寂しそうな瞳をして、微かに微笑みながら教えてくれた。

「キレイですよ、たくさん流れ星。

私こんなにスゴイの観たことありません。

きつと、実際観たら動けなくなっちゃうんでしょうね。」

「そうだな。動けなくなるほど、キレイだよ。」

さっきまで、雲はあるもののいい天気だったのに、暗ったくなってきた、風も強く吹いてきた。

準備室のカーテンは、バサバサと音をたてている。
いまにも雨が降りだしそうな怪しい雲ゆき。

それでもセンセは、パネルを物悲しい眼差しで、じっと見つめたままだった。

私は何か言葉をかけてあげたかったけど、どんな言葉も無意味なように感じた。

ただ黙ってセンセの横顔を見守ることしか出来なかった。

更に風は強まり、いよいよ雨が降りだしてきたようで、準備室にもいくらか吹き込んできた。私は慌てて窓を閉めた。

「すまない。」

「いいえ。でも、センセ、ツラそう。かわいそう。」

窓を閉めたことに対してなのか、こんな表情を見せたことに対してなのか

何に対して謝っているのかも分からない。

ただ確かなものは、私の目に映る今が全て。

やっぱり、センセは何かを抱えているのかもしれない。

そう思うと同時に、昨日は友ちゃんに、本当の事を明かさなくてよかったかもしれない。っと勝手な解釈をしていた。

「いや、私自身の問題だ。戒めでもある。そして、乗り越えなければならぬ壁でもあるから。」

センセは目を閉じて、まるで自分に言い聞かせるように

一言一言、ゆつくりと丁寧に話した。

「あつ。問題。そう、問題で思い出した。センセにちょっと伝えておいた方がいいかな？　と思って今日来たんです。」

センセの一言で思い出したけれど、大事なことを忘れていた。今日何故わざわざここへ来たかの意味を。

「昨日、高木さんから聞いたんですが

先月、偶然喫茶店でセンセとお茶をしていたところ、後輩と言っていたから、1年生の誰かが見ていたようなんです。

その子は私だけは高木さんの友達として顔を見たけれど、相手はセンセだと思わなかったようなので名前は出てきませんでした。

もちろん私、センセだとは言わなかったです。大丈夫ですよ。

それに誰にも言っていないですから。安心してください。……っとそれだけなんです、一応話しておいた方がいいかな。　　と思ったので。

じゃあセンセ、私、帰りますね。失礼しました。」

センセは一瞬眉をひそめるように、難しい顔をしたけれど、黙ったまま時々相槌をうつかのよう、に頷き私の話を聞いていた。

そう、頷いていたんだから、恐らく聞いていたはず。

とりあえず話したかった内容は話せたし、折り畳み傘しかない私は、雨が酷くならないうちに帰りたいので、カバンを手にすると急いで準備室を出ようと扉に手をかけた。

「姫！　姫くん、待ってくれ。」

ビクッとして、私は驚きのあまり言葉が出なかった。

手は扉にかけたまま、ピクリとも動かなくなった。
センセ、今、私を名前で呼んだ？

「いや、ありがとう。雨も強くなってきた、車で送っていいこう。」

夏に向かう季節の変わり目の雨は、窓ガラスに叩きつけるように更に強く降っていた。

裏門脇の駐輪場で雨宿りをして私は待っていた。

濃いピンクのサルスベリの枝が、風に吹かれて大きく揺れ、パラパラと花が散っていた。センセは車を裏門に横づけにした。

急いで駆け寄った。センセも降りてきてヒョイっと私を助手席へと乗せてくれた。

「すみません。乗せてもらっちゃって。後ろじゃなくていいんですか？」

助手席なんて特別な気がして、ドキドキしてくる。

大きな車だし、センセとタバコのおいがある。

あの喫茶店の時以来、何だかセンセにはドキドキしっぱなしなんだよね。

「何故だ？」

「だって、フツー助手席って恋人専用の席とかっていうじゃないですか。だからあ。」

こんな所を見られたらまた勘違いされるし、お店で一緒だったあの人とかにも悪いし。

一応やっぱりねえ、こういうことは聞いておいた方がいいかな？
なんて思っちゃったから聞いてみた。

センセは、ゆっくり車を発進させながら、軽く笑った。

そして、ずっと気にかかっていた謎を解いてくれた。

「気にしなくていいんだ。第一そんな特別な人は残念ながらない。恐らく君は誤解をしている。あの時一緒に居たのは、二歳上の姉だ。あの日も、教員を辞めて、父の会社をそろそろ継いでほしい。つと
いう願いだった。」

病気の父のこと、グループ会社の取り纏めの事など頼ってしまっている姉には、本当に申し訳ないと思っている。

しかし、私もこの仕事を誇りに思っている。

変わらない、不器用な男さ、私は。だから、今は協力や手助けをすることは出来ても、まだ戻るわけにはいかないんだ。」

第7話：夏休み

夏は嫌いじゃない。

だけど、特に好きでもない。

強いていうなら、夏休みで、好きな読書がたっぷり出来るからいいかな。

たいてい家の中で課題をぼちぼちやって
たっぷり読書。っていうのがフツ―。

終業式の翌日に、蓮からメールがきた。

『月末、みんなでプールに行く。』

姫、どうせまた部屋にこもって、本、読んでるんだろ。

集合場所や時間が決まったら、また連絡する。蓮』

相変わらずこんな一方的な言い方だった。

多分、蓮の事だから、氣遣ってくれて誘ってくれたんだっていうのも分かる。

しかし、アウトドア系じゃない私だから、水着だって持ってない。
だから、慌ててユリちゃんと友ちゃんにメールをした。

『週末、一緒に水着を買いに行くの付き合って！』

都合や時間は合わせるから。おねがい（；人；） h i m e』

早速二人から返信が来た。

ユリちゃんからは

『珍しく、この週末は予定が入っていないから、お買い物に付き合
ってさし上げてもいいわよ。』

ただし、イーストモールの先にある、プリンセスホテルのスイーツ
バイキングに行ってくださらない？

15..00から平日の2時間限定ですの。ですから、お買い物は金
曜日にしましょう。

一人で行ってもいいんですけど、姫さんも行きたいんじゃないかし
ら？ っと思ったものだから。』

友ちゃんからは

『予定が合えばいいよ！ っというか行きたい！』

私は今年の水着はもう買っちゃったんだけど。姫ちゃんに合う水着
選んであげるわ。

週末っていつ？ 土曜日はダメなの。金曜日か日曜日ならOKよ。』

っていうことで、金曜日のお昼ちよつと前に集合して

買い物が済んだら、スイーツバイキングに行くことにした。

金曜日。

女の子三人での買い物は、騒がしいけど楽しい。

目的はあっても、のらりくらりとあっちへフラフラ、こっちへフラフラだけど楽しい。

寄り道したお店で、可愛い帽子をかぶってみたり、お互いに交換してまたかぶってみたり。

ストールなんか巻きつけてみたり、鏡の前で色んな巻き方やかけ方を練習してみたり。

あっという間に1時間くらい経ってしまったている。

意外にも、ユリちゃんは普段ぶらぶらとショッピングをしないらしい事がわかった。

さすがお嬢さま、車でスマートにお買い物なんだわ。

水着ももう既に、何着か持っているらしい。

もちろん今年の新作ばかりをね。

友ちゃんも、既に新作の水着をGetしてあるっていうことで、今年の流行りなんかを教えてくれた。

もちろん、彼氏と海に行く予定だとか。いいなあ。

私もそんな予定入りたいよ。けど、現実には蓮や友達とのプール止まりだけ。

友ちゃんオススメの流行りのは派手で気後れしちゃって、あててみるのも恥ずかしい。

ユリちゃんの薦めてくれるのは派手というより、大人っぽ過ぎて見ただけでご遠慮します。っていう感じだった。

みかねた友ちゃんが、代わりに別のを何枚か選んでくれた内の1枚に決めた。

大きめなクリーム色の花柄で、地がグリーンの長めのパレオ付き水着にした。

これで、手持ちの白いふんわりとしたパーカーを合わせるつもり。

目当ての買い物が済んだら、ホテルのカフェでやっているスイーツバイキングに直行！

ユリちゃんのオススメだから絶対ハズシはないと思ったけど、とっても豪華なホテルで驚いた。

普段は入れないような、親戚の結婚式でもなければ来ないかもっていう素敵なホテルの1階。

平日限定の15…00から2時間だけの企画。

3人共片っ端からたーっぷりとデザートを食べて、もう何も食べられないっていうくらい食べたかも。至福の時ってこういう時の事を言うのかもしれない。

大満足でカフェから出てきた。

すると、遠くにエレベーターから降りてきたカップルが目に入った。最初はちょうど視線の真っ直ぐの位置だったからだと思った。

だけど、だんだん輪郭がはっきりと分かってくると、目が離せなくなっていた。

なぜなら、その男性は蔵前センセそっくりだったから。

いや、そっくりなんかじゃない。本人だ。

私が呆然としていたからだと思うけど、ユリちゃんも友ちゃんも気が付いたようだ。

現にユリちゃんが第一声を発した。

「あら、あそこにいる方って蔵前先生じゃないかしら。なんだかプライベートで良い感じじゃない。ねえ、そう思わない？ 姫さん。」

私は話しかけられているのも上の空で聞いていたようで、生返事の「はい。そうですね。」っていう感じの言葉しか発せられてなかったように思う。

確実にいつだったかのセンチのお姉さんっていう女性とは似ても似つかない人だった。

こんな素敵なホテルでの二人はとても絵になる雰囲気だった。

何故だか私の胸の奥がきゅーんと締め付けられる様な気持ちになった。

センチはみんなの憧れだもの、恋人の一人や二人いるはずよね。

っていうかフツー恋人って一人か。ともかく、プライベートな時間だもの、私たちがどうこう言うのはおかしな話よね。

あの日、車で送ってくれた帰り道。

謎の女性は、センチのお姉さんだと教えてくれた。

定期的に話し合いをしているらしい。って話もしてくれた。

だけど、その後はたいした話もしないで私の家に着いてしまったから、挨拶して車を降りた。

私の中では釈然としないまま、夏は過ぎてゆく。

第8話：学園祭

夏は、一本の映画を観ているように過ぎ去った。
私がココに居ても居なくても
一寸の狂いも生じないであろうかの如くに。

私にとっての高校生活の半分は
入院・転校・友人関係などなど
私自身が望んで起こったわけではないのに
いろいろな事が起こってあつという間に過ぎていつてしまった。
もう少しゆっくりのんびり過ごしたいのに
時の流れは私の気持ちなど無視して急ぎ足だったりする。
あえて立ち止まって考えてみたり
流れに逆らってみたり
私なりの抵抗はしているつもり。
だけど、周りにはそう映らないらしい。

「姫は興味や感心なさ過ぎだよね。」

「姫ちゃん、もうちょつと頑張ってみようか。」

「おせーよ、お前。」

「天然はいつてるよね、姫って。」

そんな風にいつも言われる。

自分自身ちょつと変ってるかも。って思うことはあるけど
誰かに迷惑掛けたわけじゃないし。

周りの流れに逆らっても、空気を乱したりしてない。
ただ、私はココにいる。それだけなんだけどなあ。

今はみんな学園祭に向けて一生懸命になっている。

ウチのクラスは、田舎茶屋風の喫茶室。

教室の後ろには、作りかけの室内装飾が入ったダンボールが積み上げられてる。

毎日は同じように過ぎて、校内のいたる所にカラフルなポスターが貼られている。

最近、友ちゃんにもユリちゃんにも言われる

「姫ちゃん、時々コワイ顔してるよ。どうしたの、何かあった？
言ってみなよ、相談のるよ。」

「姫さん、不機嫌な顔をしていますよ。それではプリンセスの素質がいつになっても磨かれないですわ。笑顔になりなさい、笑顔に。」

そう、ずっと気になっていることがあるから。

夏休み直前のあの日。

センセの言った一言が気になっているの。

「姫！ 姫くん、待ってくれ。」

あれ以来、私を名前だけで呼ぶことはない。

特別変った素振りをしてるわけでもなく。

他の生徒と同じように話してくれる。

日直や地学の授業後のお手伝いで準備室に行っても、変わらず優しい笑顔で迎えてくれる。

あの寂しそうな辛そうな表情は見せない。

もう一つ気になっていることがある。

夏休みにスイーツバイキングに行ったホテルのロビーで見かけた女性。

センスと何か楽しそうに話していた、あの人は誰なんだろう。

もちろんセンスは、私達3人が見ていたのは気が付いてない。

ロビーに飾られた大きな観葉植物に隠れて、そーっと気付かれないように外へ出てしまったから。

なんで最近こんな風に考えているのか、自分でも分からない。

誰かに相談しようにも出来ない。

だって、それが何？ って言われてしまうような大したことない事だし。

サラッと流して、毎日を楽しく過ごそう！ そう考えればいい。

私だってそのくらい良く分かってる。

だけど、気になってしょうがない。

気になるから何も集中できない。

集中できないからイライラしてくる。

イライラしてくるから不機嫌な顔になってる。

全くの悪循環。

昨日の帰り道は気が付かなかった。

おそらく今日一斉に花開き薫っているのかもしれない。

ありがとう。オレンジの星の花たち、何かが吹っ切れた気がする。

清々しい気持ちで、笑顔の私になれそう。

学園祭では、お店番用の絆纏を着て接客。

教室の中もゴザを敷いたり、¥100ショップで見つけてきた紅葉

の枝を点々を飾ったり、『秋の田舎茶屋』をイメージした飾りつけで工夫してある。

ヒロトくんやユリちゃん達とお店番をした。

蓮は、体育館でやるバンドバトルに出演するから、当日は無理だけど前日までは手伝い頑張るとか言って、店番のメンバーには入ってなかった。

1時間交替でお店番をしたので、交替の時間になったらみんなで急いで体育館に行って、蓮たちの演奏を聴いた。

ステージも飾り付けされていてキラキラしていた。

私達が体育館に着いて、会場に入った時は、蓮たちのバンドが予選を突破して、本選の演奏を始めるってところだった。

凄い熱気と大きな音に、最初はびっくりしたけど、歌詞を聴いていたら切なくなつた。不思議と無意識に涙がこぼれ落ちそうになった。

演奏が終わって、発表まで模擬店を見に行こうっていうことになり、会場を出ようとした。

会場の後ろの壁に寄り掛かりながら腕組みをしてセンセが立っていた。

私はフツッっぽく挨拶しかけたら、ユリちゃんの衝撃的な発言が飛び出した。

「蔵前先生、こんな所で一人ですか？　いつぞやの方とご一緒に楽しめばよろしいのに。」

私は驚いてすぐさまユリちゃんを見た。

一瞬”しまった”っていうような顔をしたけれど、直ぐに涼しい表情に戻って、小さい声で言葉を付け加えた。もちろんにこやかに悪びれもせず。

私はセンセの顔なんて見られる余裕はなかったし、ユリちゃんから今度はどんな言葉が飛び出すのかヒヤヒヤして、顔を上げられずに、ただ自分の足元を見つめているだけだった。

「夏に、プリンセスホテルで先生をお見かけしましたの。素敵な女性といらしてましたわよね。」

「特別な女性など私にはいないから、誰のことなのかと思えば、そういうことだったのか。」

センセはいたってフツーに流しているようだけれど、小さな笑いを挟みつつ自分に降り掛かった濡れ衣を晴らすために、真剣な声色で話を続けた。

「おそらくユリくんが見かけたのは、見合い相手のことだ。病気の父の手前、グループの取引相手の会社のご令嬢との見合い、会うだけだからと言われて、断ることが出来なかったんだ。」

「っというわけで、こんなところで一人で楽しんでるっという訳だ。」

耐え切れずに、私はユリちゃんの袖口をつまんでクイツと引っ張った。

まあ、内心ユリちゃんの大胆さには拍手モノだったけど、誰かが止めなきゃ本当にヤバそうだった。

収拾つかなくなりそうだったから、蓮たちのバンドの結果発表が始まるまでの間、早く退散したかった。

そんな風にして会場をあとにする彼女達を、蔵前教諭がヤレヤレという表情で見送った。

第9話：計算違い

一年の中で一番長いはずの2学期も

行事が目白押しで、一番あつという間に過ぎていくような気がする。中間考査、学園祭、期末考査、球技大会、芸術鑑賞会……

授業もテンポ良く進み過ぎて、いつも追いつこうと精一杯な私。

何はともあれ、季節は待ってくれない。

赤は間逃れても、補講指導はしっかり参加させられた。

庭の蠟梅ろうばいの枝先にふつくらとした蕾が増えてきた、クリスマスが近い。

2学期もあとわずか。

今日は、私も友ちゃんも振り回されっぱなしだった。

まあユリちゃんのお嬢様っぷりは、いつもの事なんだけど今日はハードだった。

冬の土曜の朝、6…00amくらいにメールが来て起きた。

ユリちゃんからだった。

私と友ちゃんに一括送信されてた。きっと今頃友ちゃんも起こされてるのかも。

『おはようございます。お目覚めいかが？』

今日は、来週末の仙川君宅でやるクリスマス・パーティーのため、3人でお買い物に行きましょう。

私、一つどうしても作りたいものがあるの。

だから、そのための材料の見立てをお二人にお願いしたくて。

9…30amくらいに迎えを出しますから心配しないで。』

はあー？

プレゼントならそれぞれで買わないと中身が分かつちゃうからなあ。何を作りたいんだろう。

しかも、今日の今日ですか。

あの一今起きたんですけど、っていうか起こされたんですけど。だから、お目覚めとっても悪すぎます。

ってそんなことは言えません。お嬢様に通じるわけがないし。

迎えが来るまでのタイムリミット3時間か。

とりあえずシャワー浴びて、頭の中起こさなきゃ。思考回路ゼロ。

私もお料理担当だから、ついでに揃えられるもの買ってこようっと。迎えてことは、どうせ帰りも送ってくれるだろうし。

次は、天気予報をチェックして、着ていく洋服選び。

ブツブツひとり言を言いながら、クローゼットを全開にして、ベッドの上にいっぱい洋服を並べてみる。

お迎えに来てくれるって書いてあったけど、やっぱり買い物だから歩くよね。

デニムパンツに黒ブーツで、足元ハードにするでしょ。

上は。上ねえ、どれにしようかな。

赤のタータンチェックのチュニツクじゃ、クリスマスパーティーに行くんじゃないし、違うし。

黒のタートルニットでしょ。

ターコイズのシフォンのチュニツクブラウスっと。

仕上げにソフトデニムのキャスケットでOK。

お迎えは9…40頃に来た。

後部座席に乗り込むと、先に友ちゃんちに寄ったらしくすでに友ちゃんが乗っていた。もちろん助手席にはユリちゃんが朝から元気で

爽やかな笑顔で迎えられた。

先ず、ユリちゃんが作りたいのはリースらしい。
だから、オーナメントを付けたいので強力な接着剤を手に入れたい。
ってことだった。

「それなら、大きめな手芸店にグルーガンっていうグッズがあるわ。」

「
」
っと直ぐに解決した。

しかし、次に質問されたのは全く違うものだった。

先日持っていた、茶色くて丸い可愛いものは、一体何処のデパート
に行ったらたくさん手に入るのか。っていうことだった。

プリンセスの素質を磨くためのグッズ「たわし」を持っていた私に、
キラキラした目で近寄ってきたユリちゃん、お嬢様な彼女にはこんな
忌々しいものも、可愛く映ったのね。って思ったばかりだったか
ら直ぐに分かった。

「ユリちゃん、デパートにはないの。ホームセンターに行かないと。」

「
」
っと話したら、ホームセンター自体を知らなかった。

結局、グルーガンもホームセンターにあるからってことで、ホーム
センターに。

その後は、飾りつけのグッズや洋服も買いたいからって、車を降り
てショッピングに同行。

私も自分の準備グッズを買ったりした。

たっぷり歩いてお腹も空いてきたので、和風パスタ屋さんで3人で
ランチをした。

すっかり疲れもとれた頃、ユリちゃんが車を呼ぶかと思いきや衝撃
発言。

「お天気もいいし、たまには歩いてみたい気分だわ。では、今日は
ありがとう。ごきげんよう。」

開いた口が塞がらないっとはこういうことかも知れない。

しかも、友ちゃんがバイトの時間だから。と急いで向かっていった。

突然一人になった私。

しかも帰りはすっかりアテにしていたから、調子にのって余計に買
って大荷物に。

どうしよう、ママは運転できないし。

パパは今日は仕事で出掛けてるし。

蓮のバイクじゃ荷物が乗らないし。

あきらめてバスでも乗って帰るか。

押されながらも人波に逆らうように、トボトボと歩き始めた。

第10話：めぐり逢い（前書き）

長いです。はい、長くて2つ分くらいです。
でも、どうしても分けられなくて、すみません。

姫ちゃんの中で憧れから変化する、揺れるキツカケですね。

第10話..めぐり逢い

突然にして

偶然にして

冬の冷たい空気に交ざりながら
貴方は一筋の光のようだった。

「姫くん、大丈夫かい？」

人波に流されるように歩く私の右腕をいきなり掴まれ、誰かに呼ばれた。

驚いた私は咄嗟に目をつぶり、声をあげてしまった。

だけど、今まで人波に流され押されていた圧迫感がなくなっていた。
見上げるとそこは、私だけが知っている“休日 of センセ”の腕の中だった。

それは一瞬の出来事だったけど、私にとって1秒が1分にも感じるくらいゆっくりと流れるような感覚だった。

「キヤア！ あっ！ 先生！ ありがとうございます。／／／／／」

恥ずかしさのあまり、まじまじと顔を見られなくて、ちらっと見上げてみるセンセの顔は、一瞬何かを躊躇った表情かおをしていた。
でもすぐに目を細めた優しい笑顔になっていた。

そして、私の手にある大きな紙袋を持ちながら言った。

「いや、大丈夫だ。少し私が荷物を持ってあげよう。しかし、本当にたくさんの荷物だね。」

「あつ、友達と買い物してたんですが、友達は急用が出来て分かれたところだったんです。先生は、今日はお一人でどこかへお出かけですか？」

人通りの多い道の端で、私をかばうように立ち、自身の鞆と大きな紙袋を余裕で持ち、不思議な格好での立ち話になってた。

なんかこのカットって、映画のキスシーンみたいなんですけど!!

なんて頭が勝手な想像力発揮しちゃって二度目の驚き。

焦って緊張したら、今度は口が勝手におしゃべり。

センセも、どこことなく照れた感じにみえた。

「いや、恥ずかしい事なんだが、今朝、私の不注意でカップを割ってしまい、代わりのものを買いに来たんだよ。

そうだ、よかったら、姫くんに見立ててもらおうかな。時間は大丈夫かい？」

「時間ですか、全然大丈夫です。でも、私なんかでいいんですか。とっても嬉しいです。」

驚きは更に続いて、何となくきいた事からセンセのお買い物に付き合う展開へ。

もう今日の私、どうなってるの？　なんて神様に尋ねたい心境だった。

「勿論だとも。では、この近くに車を止めてあるから、姫くんの荷物は積んでおこう。」

歩きながらセンセは、この界限の事を教えてくれた。

さっきの人通りの多い道は新しく作った道で、今歩いてる道は旧道にあたる道なんだとか。

確かに小さなお店が点々と並んでる。

通りの左側に素敵なアンティークショップを見つけた。

店先にシクラメンとポインセチアの寄せ植え鉢が飾られていて、緑色の扉が、映画や何かの雑誌で見かけたパリの裏道りにありそうな素敵なお店だった。

センセに促される様にそのお店に入った。

「素敵なお店ですねえ。先生は、いつもこういうお店に来るんですか？」

どれもこれも素敵で目が回りそうです。

えーっと。ああ！これなんかいいんじゃないですか？先生にピ

ツタリだと思ふなあ。」

店内に一歩足を踏み入れた瞬間、お店の雰囲気魅了されてしまい、一目惚れしてしまった。

ゆっくりと歩きながら一つ一つ見ていった。

そして、白と黒の市松模様の脇にチェスの駒のデザイン画がいくつか描かれたペアのマグカップを見つけた。

早速センセを呼んでみた。

その時、隣に並ぶ白と赤の同じデザインのカップも気になった。お揃いでいいなあ。って。

「おお。なかなかいいじゃないか。それに決めよう。

では、もう一つ。準備室用にコーヒークップを一つ選んでほしいんだが、お願い出来るかね？」

私が選んだカップをセンセも気に入ってくれて、即決してしまった。

だけど、今度は準備室用のコーヒーカップをも頼まれてしまった。まさかイヤとは言えないし、見て回るのは大好きだから引き受けた。

「えっ!？ はっはい。解りました。うーんと、えーつとお、うわあー! これって可愛い♪ うーん、でも準備室用だもんねえ。違うかあ。」

引き受けたのはいいけど、どれも素敵で迷ってしまう。

その中でも一際目に止まったカップがあった。

一度通り過ぎてしまったけど、後ずさりしてよく見てみると、何気に見覚えのあるカップだった。そんな私の隣に、知らない間にセンセが並んで立っていた。

「いや、可愛い。それにしよう。」

実はこれは、私が準備室で使用しているものと同じシリーズなんですよ。」

「そうなんですネえ。だから、何だか見覚えがあって、親しみがある感じがして惹かれたのかもしれないですねえ。」

センセのお手伝いが出来て嬉しかった。

私はそっとコーヒーカップを持って、カウンターに運んだ。

「私は清算しているから、しばらく店内を見ているといい。もし欲しい物があったら一つくらいは買ってあげよう。」

今日のお礼だ。」

運び終わると、センセはそう言ってまた柔らかな笑顔をくれた。

私はお礼とかって言われなくても、きつと素敵な小物たちに囲まれてウキウキしちゃって店内をぐるぐると見て回っていたはず。

そんな素敵な小物たちの中でも一番惹かれたものがあって、しばらく見入ってしまった。

「さあ、見つかりましたか。お姫様。」

そう言ってセンセが後ろに近づいた。まるで執事のように控えめな物腰で。

もちろん『お姫様』って言い方もごく自然で、嫌みのない感じで心地よかった。

「あつ。これ。素敵だなあって思ってた。」

綺麗な装飾が施された小さな箱を手にして、そおっと蓋を持ち上げた。するとゆっくりと澄んだ音色で『星に願いを…』を奏でていた。

「では、それを私からのプレゼントにしよう。少し待っていないさい。すみません！これをプレゼント用にラッピングしてください！」

可愛らしい包装をして、店員は綺麗なペーパーバッグに入れてくれた。

店を出ると早速センセにお礼を言った。

「先生。オルゴール、本当にありがとうございました。私、絶対に大事にしますね。」

「いや、私の方こそ、本当に姫くんを選んでもらって助かったよ。ありがとう。」

では、薄暗くなってきたし……何しろあの大荷物だしね、帰りは車

で送ってあげよう。」

駐車場に着くとトランクを開け、大きな紙袋を積み込んだ。

次に、先ほど買ってきた2種類のカップが入った紙袋を積んだ。

私は、オルゴールの紙袋を大事に抱えて車に乗り込むと、センセはゆっくりと冬の夕暮れの街を走り出した。

「少し、私の昔話に付き合ってくれるかな？」

センセが少し緊張したような声で、静かに沈黙を破った。

私の胸の奥がザワついて言葉に出来なかったけど、コクリと頷いた。

「この前話した流星群の話は覚えているかな？」

「オルフェウス流星群ですよ。」

私まで緊張しかけたけど、星の話だったのでザワつきは治まらなかったけど、すこし心が軽くなった。

「そうだ。父と初めて見たのが、オルフェウス流星群だった。

宇宙という、どこまで続いているのか分からない世界で、たくさんの星たちが瞬いている。

それだけでも夢が詰まっているのに、まるで雨のようにその星たちが一斉に降り注いでいくんだ。

そして次は、学生の時にあのパネルの流星群を撮影した。さらにその次は、次は、見られなかった。」

「センセ？ 大丈夫ですか？ どうして見られなかったんですか？」
急に言葉が途切れてしまって不思議に思ったので、心配になって声

をかけながらセンスを見てみた。

すると何か意を決したように深呼吸して、車を脇道に止めた。

私のザワめきは激しくなり、瞬きも出来ないくらいだった。

センスはハンドルから手を離し、膝の上で拳を握りしめ、目を閉じたまま話し始めた。

「私が新任の先生になった頃、1人の女子生徒に出逢った。

私が担任をもつクラスにいて、天文部にも所属していた。と言っても部員はその頃は彼女1人になってしまっていたけど。

とても星が好きで、いつも星の写真集を見ていた。どこまでも真っ直ぐでいい子だったよ。

そして出逢って2年目に、オルフェウス流星群の飛来する機会が訪れた。もちろん彼女は絶対に見たい！と豪語した。」

そこまで一気に話すと、ゆっくり眼を開けて、フロントガラスを真っ直ぐ見据えて話を続けた。

本当は内心その先は聞きたくないって思ったけど、私の知らないセンスも全て知りたいとも思ったので、黙って聞いていた。

「彼女はその日をずっと待ち望んでいた。病院のベッドの上でね。気付いた時にはもう手の施しようがないくらい病魔に冒されていたんだ。

絶対に見るんだ。っと彼女は最後まで願った。あと1日、あと1日、っと。だが、彼女は流星群を見る前に亡くなってしまったんだ。

私はずっと恐れていた。流星群を見てしまうことで、絆が消えてしまう気がして、怖かったんだ。

……生徒以上の感情で、見ていたのかもしれない。

とても真っ直ぐで輝いてみえた。私には大切な存在だったのかもしれない。」

『やっぱり聞きたくなかった』っていう気持ちと

『星の好きな女の子が可哀そう』っていう気持ちが合い交わって、涙が溢れそうだった。

しかし続く言葉は全く違う意味合いの言葉だった。

「今年のオルフェウス流星群は見に行こうと思っている。姫くん。一緒に見に行かないか？」

「はっ、はい。」

頭の中が全く整理が付かず、ただセンセと流れ星を見にいかうと誘われたんだという事だけで、詰まる言葉をムリやり声にして返事をした。

そして、オルゴールの入った包みをギュッと抱きしめた。

驚きの連続とドキドキの長い長い一日が終わろうとしていた。

第11話：告白

土曜日の夜はなかなか寝付けなかった。

日曜はどんなふうに過ごしたかすら覚えていない。

知らぬ間にまた新しい一週間が始まっていた。

毎日、授業中もHRの時も、センセを目で追うけど、なぜだか苦しい。

かといって、目で追うことをやめてみたって、苦しいのは治まらない。

むしろ目で追わないでいる方が、更に苦しく泣きだしたくなるほど。いったいどうしたというのだろうか、私。

地学以外の教科も、半分は意識がない。

寝ているわけでもなく、キチンとノートはとっている。

大好きなPINCEPEの写真集を見ても、璃鈴さんはカッコいいけど所詮手の届かない世界の人って思ってしまった。

ファッション雑誌をパラパラと捲ってみるけど、綺麗なモデルさんみたいなプロポーションじゃないし、なんて思いながら見てるから全然楽しくない。

図書館で借りた新刊本を開いてみるけど、なんか全然頭に残らないで、活字だけが流れてゆくだけ。

友ちゃんから借りたCDをかけてみた、この冬メジャーデビューしたバンドのCDで、少し擦れたヴォーカルのラブバラードだった。

自然と涙が溢れてきた。

センセの寂しそうな表情が浮かんできた。

そう思ったら苦しくなってきた。

ある日、図書館に行った。

普段から何もない時も、悩み事がある時も、調べものがある時も、いつだってフラフラといってしまう場所だから。

自然と天文学の書棚の前に立っていた。

『星空観測をしてみよう』

『星座ガイドブック』などの易しい私向けのものから、センセが読みそうな専門書っぽい本まで色々ある。

一冊だけ気になって手にとった。

『月に恋』

表紙には、夜桜の合間から見える月がはかなげに写っていた。

そのまま借りて、以前拓海先輩に教えてもらった、屋上の隠れ家っぽいところで読んでいた。

読み終えた時、心が淋しくて哀しくて、涙が溢れていた。

土曜の夜、真剣な眼差しでセンセの過去を話してくれた時の声が、言葉が、表情が思い出されて、ドキドキと涙が止まらなかった。

星の好きな女の子とセンセの事。

見ないと誓った流星群を今度私と見たいと言ってくれた事。

———コン。コン。

「センセ？ 滝澤です。」

「どうぞ。 鍵は空いているから、入って来なさい。」

準備室の扉をノックした。

中からは、いつもと同じ優しいセンセの声がする。

その声を聞いただけで充分って思う私
早くセンセの顔がみたいと思うワタシ
少しずつ近づく足音を聞いて、なぜか怖くなって涙がこぼれ落ち、
足がすくんでしまう。
涙をこらえ、呼吸を抑えて声を搾り出した。

「開けないでっ！ センセツ。 っく。」

足音が止まった。

しかし、扉は開けられた。

「姫っ！」

そう言うなり、いきなりガシツとしっかり抱きしめられた。
温かい逞しい腕の中で、堪えていたいくつもの感情が溢れ出した私の身体は、ゆっくり空気が抜けてゆく風船となった。

「直ぐに温かい飲み物を淹れよう。さあ、中で休みなさい。」

センセはそう言いながら抱きかかえソファーに連れてくると、そつと私を座らせた。

小さめなブランケットで優しく包まれると、そのままソファーの隅に寄り掛かるように丸くなっていた。そんな私の肩を優しく撫でてくれた。

ゆっくりと身体を立てて、カフェオレを持たせるとセンセは隣に座った。

しばらくの間、沈黙が続いた。

どちらからともなく、お互いを見つめ合い、ただ秒針が時を正確に刻むリズムだけが部屋に響き渡っていた。

「センセ。あっ！」

「姫くん。うっ！」

二人同時に呼び合ってしまった。

とりあえずお礼を言いたかったただだから、センセが話すのをまた待った。

「すまない。何だね、ゆっくりで構わない、さあ話してごらん？」

とりあえずお礼を言って、思い切ってここ一週間足らずの溜まった心の中の苛立ちというかモヤモヤを打ち明けてみた。

「センセ。あのお、この間はありがとうございました。

私、あれから色々な事が頭の中ぐるぐるとしていて、自分自身どうしたいのか、何を感じて、何をしたらいいのか、分からなくなっちゃってたんです。

センセ、訳もなく哀しくて。苦しくて。淋しいんです。

でも、さっき、センセに抱きしめ、られて。 あったかかった。」

そこまで言うとう自分が恥ずかしくなって、また下を向いてた。

良く見ると私が手にしていたのは、土曜日に私と選んだコーヒーカーップだった。

心が温かくなって嬉しくなって、カフェオレをコクコクと飲み乾した。

すると、ブランケットに包まれたまま抱きしめられて、ビックリしたけど嬉しくて、ただじっと温かい逞しい腕に身を委ねていた。

「姫くん。実は私も最近落ち着かなくてね。訳もなく哀しくて。苦しくて。淋しいんだよ。」

それに今日、久しぶりに君がここへ来てくれて、とても嬉しくて温かい気持ちになれたんだよ。」

だから、不器用な私だが、今の姫くんの気持ち、とても理解出来ている気がするんだ。」

上手く伝えられているか分からないが、私は君に出逢えて良かったと思っている。そして、私の出来る全てをかけて、君を悩ます全てのものから守りたいと思っている。」

嬉しさが涙になって声にならなかった。

ただ頷くことだけしか出来なかった。

それでも私を支える腕にキュッと力が掛かった事で、きつと分かってくれたんだなって思えた。

「そういえば、さっきはとても冷え切った身体でここへ来たが、こんな時間になるまでどこにいたんだい？」

「屋上です。でも、なるべく風の当たらない場所、知っているの、そこに座ってうずくまってセンセの事、いっぱい考えてました。」

いっぱい考えたけど、やっぱり分からなくて。逢いたくなって、気がついたら準備室の前に来てました。

でも、センセが近づいてくる足音がしたら、何だか急に怖くなって。」

「姫くん。もう分かったよ。もう何も言わないでいいんだよ。もう大丈夫。私がついているからね。何も心配しなくていいんだよ。ずっと、ずっと君を守ってあげるから。」

そう言って、言葉が詰まって話せなくなった私の頭を、何回も何回

も撫でてくれた。
この一週間近く、私の心の中に降り積もった雪が溶けてゆくようだった。

第11話：告白（後書き）

ここに出てきた『月に恋』（ネイチャー・プロ編集室 編／PHP出版）は実際に地元の図書館で見つけました。とても素敵な本でした。

しかもホントに「天文学」のコーナーにありましたので、驚きました。

第12話..決心

フラフラと地学準備室に行って、センセも私と同じ気持ちなのだと聞いてから、時間があると準備室に行くようになった。

一人の時も時々あるけど、たいてい友ちゃんやユリちゃんが行ったり、もっと大勢の時もある。

昨日だって、ヒロトくん、蓮と一緒に宿題を教えてもらって行った。

その間のセンセは、机でお仕事をしてた。

そんな毎日が楽しかった。だけど、そんな毎日でも1ヶ月過ぎた最近、微妙な気持ちになる時がある。

———コン。コン。

「センセ？ 姫です。」

いつもは一呼吸して、センセの声がするけど今日は違った。

名前を言い終わると同時に扉が開いた。

ビックリして後ろに倒れるかと思ったけど、センセに両肩を掴まれて間逃れたって感じだった。

「姫、大丈夫か？ ケガなどないか？」

「ひゃっ！ だっ大丈夫です！」

いきなりガラッと扉は開くし、慌てているし、突拍子もない間抜けた声を出してしまった。

「よかった。 ホントによかった。今の君に何かあったら私は。」

そう言うと、やっと掴んでいた手を放してくれた。

「センセ？ どうしたんですか？ 何かあったんですか？ センセ。」

いつもと違って動揺している感じだし、慌てていて何かあったのか心配になった。

だけど、その慌てぶりがかえって、最近の私の不安な気持ちを呼び起こし、増幅させていった。

とりあえずカバンを持ち準備室に入り、センセの両手を包むように握り締め、自分なりの言葉でだけ気持ちを話してみた。

「センセ。私は、センセの傍にいていいのかな？ ホントに一緒にいてもいいのかな？」

私はあの子になれないし、私は私だし。 だけど、私はセンセの側にいたいんです。

つりあわない子供だって分かってるし、センセみたいに何でも出来るってわけじゃないけど。

私やっぱりセンセのこと好きだし。ずっと一緒にいたい。」

「すまない。ホントにすまなかった。

君がそんなにも悩み苦しんでいたなんて、少しも気付いてやれなかった。」

私に謝りながら頭を下げるセンセ。

違う。私はそんな言葉が聞きたかったんじゃない。私自身を見て欲しかった。

腫れ物に触るようにじゃなくて、素直な気持ちで。

「せん・・せ・・い。」

「これだけは信じて欲しい。今の私には、君はかけがえのない人で、何よりも大切な人だ。

誰の変わりでもなく、そのままの君が大切なんだ。

だから、だからもうそんな風に不安にならなくていいんだよ。

”子供や大人”だとか”何が出来来る出来ない”だとか、今は不安に思ったり辛く思う事が多いかもしれない。

だけどそんな時はいつでも私の所へ来なさい。その不安を全て取り除いてあげよう。」

センセは、真剣な眼差しで、強い気持ちを感じさせながら、真っ直ぐに見つめて話していた。

強く抱きしめられ、そのまま話を続けた。

「ずっと一緒だ。しかし、未来がある君だから一時の気の迷いや憧れから、その輝かしい未来をこんな私が取り上げてしまったとは。という思いもある。

ただ憶えておいて欲しいのは、いつまでも私は君とずっといたいと思っている。」

この時、いっぱい色々な事をセンセから感じた。

そうだ、センセは真っ直ぐな人なんだ。だから好きになったんだよなあって。

そんなセンセに「大切だ」って言うてもらえて、私ってなんて幸せなんだって。

そうか、いつもいつも不安になったり疑問に思ったらこうやって解決してくれる、安心していいんだ。

今はひっそりとしなないといけないけれど、ちゃんと見ててくれてるし、守ってくれるんだ。

私もセンセにとって、何か役に立てる人になりたい。ちゃんと自分

の足で立てる人につて。

やっぱり、この人と歩いてゆきたい。つて。

第13話：つぶやき（前書き）

今回は、ちょっとお話というより、姫ちゃんのおつぶやきです。

第13話：つぶやき

以前は、みんなと同じ「好きなセンセ」って憧れだったんだと思う。でも、休日のセンセに会ってからは「大好きなセンセ」になった。いっぱいいっぱい話をするようになって

たまらなく好きになっていって、どうしようもなくなってた。

そして、全てを打ち明けたら、センセから「大切な人」って言われて、同じ気持ちなんだって分かった。

私ってセンセの恋人になってる。

っていうか、いいんだよね。ホントだよね。

でも、そうなんだと思う。

改めて思うとすごい事なのかもしれない。

普通だったら絶対にあり得ないことだと思う。

友ちゃんやユリちゃんにだって話せない

ホントは話して不安なこととか相談したいけどムリ

少しでも近くにいたいし、話もしたいけどダメ

そんな一つ一つのストレスが不安になって、涙に変わる。

でも、それも勇気を持って言葉にすれば、全てセンセは解決してくれる。

不安に思っていたことが、ちっぽけな事のように思えるくらいに。いつも優しい声と言葉と逞しい腕で守ってくれる。

授業中、今までと同じはずが、やっぱり違う。

それは私だけなの？

それともセンセも？

何も変わりはないはずなのに

気持ちだけが違うだけで
授業までこんなにも違って聴こえてくるなんて不思議だ。
テスト勉強だって、ヘンな点数とれないなあって思うから
今まで以上に頑張れる。

夜は、電話とメールでやりとり。
それもセンセの提案。

つぶ。提案っていうのもヘンな感じだけど
センセらしいといえばいいか。

直接声が聞けないと不安になるのと

メールだと言葉のみで感情が見えてこないからって理由らしい。
何だか大人だけど可愛い。

まあ、私もセンセの声聞いていたいからいいんだけど。

音楽の話や本の話、センセの星の話を聞いたり。

そんな毎日なのに楽しい。

ずっとこのままでもいいな。なんて思ってしまうくらい。

本当はセンセみたいな先生になりたいとか、司書になりたいとか、夢はある。

でも、色々考えて最終的にたどり着くのは、ずっとセンセといること、センセのお嫁さんになりたいってこと。

未だセンセには話してないけど。

来年になったらちゃんと進路も決めなきゃいけないし迷う。

やっぱり明日にでも相談しようかな。

第14話..新月

今日は、ウチの学校の入学試験日。

だいたい生徒は、今日から4日間くらい自宅学習でお休み。

私は保護者控室の係があって登校する。

担当のお仕事は、受験生徒の保護者が入試時間が終わるまでの待ち時間を過ごす部屋で、廊下や部屋付近での誘導・お茶出しが主だったことらしい。

その日の朝は、いつも通り学校への道を急いでいた。

大きな交差点の手前で誰かに声をかけられた。

私は、驚いて声がした辺りを振り返ってみた。

すると、車道には見慣れたシルバーの大きな車。

朝一番にセンセに会えるなんて、とっても嬉しくなって、車の方に駆け寄ってしまった。

「おはよう！ 姫くん！」

ウィンドウを半分くらい下げて、優しいいつもの笑顔のセンセだった。

「センセ！ おはようございます！」

「とりあえず乗りなさい！ 気をつけて。」

幸い信号は赤だったし、軽く渋滞していたので、周りを確認して大きな車に這い登るようにして乗り込んだ。

「姫くん、今日は入試日だから君は休みなのでは？」

私がシートベルトを締めるのを確認すると、センセはゆっくりと車を発進させた。

普段パパの車に乗る事はあるけれど、イマドキ不思議な職人気質な性格の父の運転とは違って、センセの運転は紳士的で安心する。安心しすぎて眠くなってしまうそうなくらい。

「あっそうなんですが、私、保護者控室の係なんです。」

「ああ、なるほど。交替制で担当があったね。お疲れ様。では、終わったら準備室に寄りなさい。」

「はい。じゃあ最後の控室の片付けとかまで終わってからなので、3時過ぎくらいになったら行きますね。」

車という、一つの空間でのおしゃべりは私たちにとって、とっても貴重な時間。

こんな風にサラリと話せるのは、準備室とこの車の中くらいかもしれない。

この入試が終わり、春になったら私は3年生になる。

ずっと一緒にこんなふうになりたいと思う反面、いつまでも誰にも言えない二人でいるのはツライから、早く卒業したいとも思う。

夕方の地学準備室。

夕焼けがキレイ。そういえばそろそろ新月、いつもより東の空が濃い藍色をしてる。

センセの撮ったオルフェウス流星群のパネルを手に取り、実際に見たら素敵なんだろうなあ、なんて思いながらパネルを見つめていた。

「姫くん。今日は一日お疲れ様だったね。」

「楽しみだなあ。私、たくさんの流れ星見るの初めてだからあ。星座の観察日記は以前課題でやったけど。」

そう中学時代に課題でやったけど、あの頃はまだ理科自体あまり得意科目ではなかったし、星座より月に興味があつたけど、今はセンチのおかげで楽しみの一つになった。

「姫くん。カフェオレが入ったよ。」

もう少しだな。春になって桜が咲き、その桜が散ったら直に流星群が見られるよ。

観察日記か。冬の夜空は澄んでいて見つけやすいから、オリオンの移動の様子など観察させるよね。」

センセは珈琲を片手に、私の左側に座って一緒にパネルを見ていた。なんか不思議。

準備室じゃないみたいな空間だなあ、すごく自然にこうやってくつろいでる。

「そうです！ まさしくオリオン座の観察を絵に書いてくるっていう課題だったんです。中学生の時なんですけどね。」

すごい、やっぱりセンセは何でも分かっちゃうんだ。

「そうだ！ 課題といえば、この自宅学習期間の課題は上手く進みそうかね？」

「うっ。それは、進んではいますが。上手くはいつてないかもです。あっ！ でも、今日の交替で待機の時間にもやってたんですよ。」

パネルを元通りに棚に掲げて、ソファへ戻る足が重くなった。

一応自分なりには計画立ててやってるんだけど、苦手な科目は進みが悪い。なんとかしないと。

「そうか。困ったね。では、理数系の課題なら見てあげられると思うが、いかん、もうすっかり暗くなってしまったな。お家の方へ連絡入れなくては。」

「ああ、両親なら旅行で留守なんです。年末に地元商店街のクジで母が当たった温泉旅行に2泊で出かけてるので。」

母なんて、『この日程だったら、学校が入試でお弁当作りしないでいいから、ちようどいいわぁ♪』なんて言ってる。」

もう二人の時間が終わってしまい、一人ぼっちの夜という現実に戻るかと思うとブルーになる。

「じゃあ、時間的には大丈夫でも外はもう暗い、私の家で課題を見てあげよう。どうだい？」

「えっ!! いいんですか? センセと一緒に居られるし、課題もはかどるし、暗い夜も怖くないし、とってもとっても嬉しいですよ!」
なんてラッキーなの!?

もう今日のセンセとの時間が終わってしまうのかと思っていただけに、嬉しくておかしくなりそう。

しかも、苦手な理数系をセンセに見てもらったらラクに課題がクリア出来ちゃうかもしれない。

さすがにこの時ばかりは、あの楽天的な母に対してとっても感謝したわ。

「わがままを聞いてやるのが男の役目だ。君は特別だ。私の前では遠慮しないでいい。」

それにまだまだ寒い季節、暗い夜の時間は長い。そんな中で君を一人ぼっちにさせておけるほど、私は大人ではないからね。」

うっ。ダメだ。カッコよすぎるよ、センセ。ただと言ってあげない。

第15話..夢物語

いつも近くにいないようにしていても、見られてるんだよね学校だと、色んな人に。

3年の男の先輩から絡まれた事もあった。

その時は、たまたま拓海先輩が通りかかって助けてくれた。

同級生の女子の中にも、転校生が親しそうに話をして。って面白くないと思っている子もいるみたいで、少なからずの嫌がらせもあった。

こんな数ヶ月間でもそうなんだから、あと1年どうやって過ごそうかな。なんて思うけど、これから起こる嫌なことの心配したって仕方がない。

だから、誰かに話すこともしなければ、センセに話すこともしない。

今、センセのお家に向かっている。

流れる町並みと同じように、頭の中をたくさん事がよぎってゆく。この数ヶ月の間で、センセの車に乗るのは何回もあった。

だけど、お家に行くのは初めて。

もちろん勉強を教えてもらうため、だけどやっぱりドキドキする。

イヤなことがあっても全部帳消しに出来てしまえるくらい。

準備室とはまた違う、この車の空間には、安心感をもたらす不思議なパワーがある。

きっとこんな事センセに話したら笑われるんだろうけど。

っていうか口が裂けても言えない。

「姫くん、お腹は空いていないかい？」

「あっはい。ちょっとは空いてきたかな？」

今日は遅めのお昼だったけど、たくさん受験生の保護者の方にお茶を出したり、誘導してたりしたから緊張しちゃって。何処にお昼ご飯入ったか分からないくらいです。」

そっかあ、もうそんな時間か。

両親が旅行だから、今夜は帰りにスーパーでシールの貼られてるお惣菜でも買って帰ろうって思ってたんだった。

「そうか。では外で夕飯を済ませてから家にいこう。」

「えっダメですよ！ カンタンなもので良ければ私が作りますから。スーパーかコンビニでもいいので寄ってください。」

センセと一緒にランチじゃなく、お夕飯一緒に食べられるなんて。

もっとママのお手伝いしておけば良かった。

ホントにカンタンなものしか作れないけど、言っちゃったものは引き下がれないし。

何作ろうかな？

とりあえず、大きめなコンビニで缶詰やカット野菜、卵とかを買ってきた。

水煮のお魚に卵を絡めて焼いてピカタ風

野菜たっぷりスープに、硬めに茹でたカラフルシヨートパスタを入れた。

カットフルーツに炭酸ソーダを注いで、デザートも完成！

仕度の間、キッチンの入り口でタバコをくわえたままのセンセに見られてて手元が狂うんじゃないかってドキドキだった。

視界の隅には、髪を下ろして部屋着のセンセ。ドキドキしない方がおかしい。

「センセ！ 手を洗ってきてくださいね。後は盛り付けて並べるだけだから。」

勝手の分からないキッチンだと余計に手惑う。

手に届く範囲のお皿やグラスを用意して、テーブルセッティング。まあ、こんなもんかな。限られた食材、時間的制約と知らないキッチンっていうリスクの中で、私にしては上出来かもね。

「センセ〜。出来ましたよお〜！ 食べましょお〜♪」

「すごいご馳走だな。姫はもういつお嫁さんにきても大丈夫だな。」

「え〜っ／＼／＼／＼そんなあ。さあ食べましょ！」

お世辞を言ってくれるのは分かるけど、ちょっとちょっと待ってよ、このシュチュエーションでそれは笑えない冗談だよ、センセ。

きつと私、顔が真っ赤になってるよ。恥ずかしすぎるよ。

「「いただきますっ！」」

両手をそつと合わせた瞬間、”いただきます”の声が重なる。

声が重なった後、二人の目が合ってお互い微笑んだ。

ホントに新婚さんみたいだよ。ずっとこうしていたいな。

何もかも忘れて、そう何もかも捨てても。

だけど、それはしない。センセは出来ないし、私も出来ない。

他愛ない会話で埋められた幸せな時間、とても満たされた夢みたいな時間は、センセの一つの質問によって幕が下ろされた。

「食べている時だけど、私から姫に一つ聞いておきたい事があるんだがいいかな？」

私はまだ幸せな夢物語の中にいたので、現状把握が出来ないまま、箸をくわえたままコクリとうなずいて、返事をしてしまった。

「以前にも話したが、もう一度言う。私はずっと姫と一緒にいたい。君自身が大人への憧れから私を見ているのなら、出逢った頃の私たちに戻った方がいいよ。」

その時でも卒業するまで君を守り続けるよ。しかしそうでないのなら、君も一生傍にいてくれると思うならば、私も一生をかけて君を守り続ける。」

センセの真っ直ぐな眼差しとトーンダウンした声で、瞬時に現実へ引き戻された。

静かに揃えた箸を置き、両手を膝に置き、不思議と穏やかな気持ちで話を聞くことが出来た。

「返事は私を呼んで応えてほしい。悲しいけど前者を選ぶなら”先生”と呼ばばいい。」

同じ想いでこれから歩んでいってくれるなら”智光”と私の事を名前と呼んで欲しい。私が姫と呼ぶように。」

「……っと、智光さん。」

気持ちでは直ぐにでも名前を呼ぼうと思ったのに、喉の奥がつまって声にならなかった。

次は、しっかりと真っ直ぐにセンセの眼を見て、ハッキリと名前を呼ぶことが出来た。

「ありがとう。すまなかった。

こんな辛い選択をいきなり持ちかけて。大人気ないが姫といると自分がどうしても抑え切れなくて、答えを急いでしまいう気持ちに駆られるんだ。許してくれ。」

「センっ、智光さん？ そんな謝らなくていいんです。だって、先生だけど、その前に智光さんっていう一人の男の人なんだもの。

私だって初めはただ嬉しいだけだったけど、時が過ぎて日を追うごとに色々迷って悩んでってするうちに、私も同じような事考えてました。

センセの隣にいるのは私なんかでいいのかな？ なんて思ったり。

だから、智光さんが言ってくれて良かったです。決心しましたし、自信つきました。私。」

静かに食事を終わると、智光さんは、隣で食後の珈琲を淹れはじめた。

私は食器を片付けて洗い物をした。

洗い終わると、リビングのソファとテーブルの間に腰を下ろし重い気持ちで思い出した課題をしぶしぶ広げた。

「さあ、珈琲が入ったよ。数学か、頑張ろうか。」

そう言って智光さんは、向かい合うように座りながらマグカップを二つ並べて真ん中に置いた。

そのマグカップは、あの日私が選んだチェス柄の色違いのペアカッ

プだった。

隣に並ぶ赤×白のペアになってるマグカップを見て、いいなあ。って思ったのを今でも覚えている。

まさか、あの時イメージしていた通りの現実が目の前にあるなんて、信じられなかった。

やっぱり、いつまでもこんな風に時を過ごして、年を重ねてゆきたいな。

第16話..ナイショ

この春、私も高校3年生になった。

智光さんは、理数系クラスの担任。

私は、文系クラスだから外れてしまったけど、友ちゃんとユリちゃんとはまた同じになれたから嬉しかった。

ついに友ちゃんにバレちゃった。

春休みに、遠出して美術館に行った時に、遠かったけどバッテリー会ってしまった。

周りは静かだし、私と友ちゃんだけでアイコンタクトで会話していたので、智光さんは気付いてなかった。

早速夜にメールがきた。

「明日はゆっくりじっくり話を聞かせてね！（b^_^）☆ともこ」

なので、翌日は私の部屋で質問攻めだった。

やはり、髪を下ろしていたので、似ているけど智光さんだと気付かなかったらしい。

ただ私の中で、色んな事を抱えきれなくなってきたので、これで少しラクになった気がした。

まず、約一年前の後輩が見かけたって話の事から暴露した。

お付き合いし始めたのは、まだ数ヶ月だということ。

今度流星群を見に行くことなんかを話した。

「絶対誰にも話さないし、協力するから。」

それに、姫ちゃんのことだから、一人でずっと抱え込んでたんでしょ。

悩み事があつたら相談にのるからさ。私に話なね。」

「ありがとう、友ちゃん。そういつてくれるだけで安心するわあ。私は本心からそう思っていた。」

話さなくても、そういう友ちゃんが存在が、何より心強かった。

「ばかねえ、話さなきゃアドバイスも出来ないじゃない。恋愛歴は姫ちゃんより長いんだから、何でも聞きなさい。」

親へのアリバイも、ちゃんと協力するから。」

そう言つて、ケラケラと笑い飛ばされてしまった。

確か一つ違いだから、友ちゃんの彼はこの春から大学生だつて言つてたよなあ。

「じゃあ、一つ聞いてもいい？」

友ちゃんは、今の彼と結婚したい。とか考えた事ある？」

まさしく、今悩んでいる事があつたから

ニッコリと微笑みながら友ちゃんが頷くを見ると、いきなりだけで単刀直入に聞いてみた。

「は？ うーん、なくはないけど、具体的にはないなあ。

でも一緒にいたいから、彼の大学受けるんだ。

もちろん勉強も！ イギリス文学やりたいからねえ。」

つと言いながらも、嬉しそうだった。

それはそれで純粋に羨ましいと思った。

他にもいくつか質問してみた。

直接的ではないけど、とっても前向きになれそうな気がした。

この頃からかな？

進学希望で出していたけど、就職のことも視野に入れ始めたのは。仮に進学して、就職して、結婚となった時はあと何年後になるのかな？

直ぐに就職したら、自分の夢は消えてしまう。それでも後悔しない？たとえ後悔しなかったとして、その時友達は大学や短大に進学しているかも。それでも大丈夫？

本当に自分がやりたいこと、なりたい自分は？

いっぱい自分の中で葛藤や疑問符が湧いてくる。

いっぱい自分と向き合える時間がとれた。

それでも友ちゃんと話が出来たことにより、スッキリしてきた。

そうそう、友ちゃんはもちろんその後、約束をキチンと守ってくれたから、誰にも話すことはなかった。

仲良しのユリちゃんにも、卒業まで黙っていた。（ごめんね、ユリちゃん）

第17話..流星群

穀雨の頃、もう一息で気温も陽射しも強さを増して安定してくるはず。しかし、まだまだ夜風にあたると冷たいというより肌寒い。

いよいよ今夜は、オルフェウス流星群が飛来する。

そして智光さんとその瞬間を観に行く約束の日で、迎えに来るのを待っているところ。

ママにはこんな時間に出発なんだもん

「友ちゃんたちや先生もついて流星群を観に行ってくるから。」って言ってきた。

もちろん友ちゃんちでも同じように話しているから、お互いにOKってこと。

恐らく、今頃友ちゃんも彼と流星群を観に出かけているはず。

ピタリと目の前に大きなシルバーの車が止まった。

登るように助手席に座り、ベルトを締めるのを確認するとゆっくり走り始めた。

「こんばんは。姫。じゃあ、私のとおきのおき場所へ行こうか。」

「はい！　お願いします！」

普段暗い道を走る時は家に帰る時。

こんな風に暗い道を、どこかへ向かって走ってゆくなんてない。

初めのうちはどんなにこの日を楽しみにしていたかってことを話していたけれど、だんだん景色が寂しくなってきた、街灯もまばらな道になってきた。

もちろん星空のキレイな場所といったら山間部なんだろうけども、ちよっと怖い。

「姫。疲れないかい？　もうすぐ着くからね。」

「はい。大丈夫です。山と違ってあんまり来た事ないから、なんか緊張してきちゃって。しかも夜で暗いし。」

「怖いかな？　私がちゃんと見ている、安心して欲しいな。」

まさか「はい。怖いです。」なんて言えない。

一生懸命に首をブンブン横に振ってみせた。

でも、やっぱり智光さんには何でもお見通しって感じなんだろうな。それって大人の余裕ってものなんだろうか、ちょっと悔しい。

――展望台の駐車場に着いた。

車を止めると、二人で荷物を下ろして準備をした。

車の前方から数百メートル先の辺りには、やはり何組か星空を観に来た人達がいる。

てっきり同じようにそこから見るのかと思って、手を振って聞いてみた。

だって、そこ以外は真っ暗で怖そうなんだもん。

「智光さん！　こっちのベンチじゃないんですか？」

「ああ、今日はそこでは首が疲れてしまうよ。こっちに来なさい。」
優しく微笑みながら歩いてきた。

小さな荷物を私に手渡すと、そう言ってまた車の後ろ側へと歩いていった。

智光さんは、トランクから毛布を左手に抱え、右手にいくつかの荷

物を取り出すと、駐車場の北側でならかな斜面になっている方向かっていった。

慌てて小走りで後からついていった。

だって、智光さんの2歩が私の3、4歩くらいだから、歩幅が違いすぎてなかなか追いつけないんだもん。

ならかな斜面にシートを広げ、その上に毛布を広げた。

すると、大きなバッグから望遠鏡を出して組み立てて、時々望遠鏡を覗きながら調整か何かをしていた。

そんな準備をしている間の私は、手持ち無沙汰で寒くなったので、もう一枚の毛布を広げて包まりながら、そんな様子をじっと見ていた。

「さあ。ここから夜空が手にとる様にみえるよ。みてごらん？」

何だか暗闇なのにワクワクしてきて、毛布に包まれたままモゴモゴと移動して、恐る恐る覗いてみた。とってもキレイでビックリした。想像していた以上にキラキラしてきれいだった。

「智光さん！　すごいすごい！　ホントに宝石箱みたいにキラキラしてる！」

「どうだい？　気に入ってくれたかな？　しかし、これからもっとすごい天体ショーが始まるから待っていてくれ。」

そう言うと、さっき私に手渡してくれたカバンから何かを出して、こちらに差し出した。タンブラーだった。

両手でそっと包むように受け取った。早速一口飲んでみると、いつもの飲みなれたカフェオレが入っていた。

特別な場所で星を見ながら、智光さんのいつものカフェオレが飲めるなんて。もうそれだけでとっても幸せだった。

その幸せな感動を伝えるのに見上げて微笑んだその時！
智光さんの頭越しに光の一筋を見つけた。

「あっ！　今、星が！！」

驚いて、反射的に光の筋が見えたほうを指差して、声を出してしまった。

たくさんの星たちが、まるで雨のように夜空を駆け抜けてゆく。
スゥー、スゥーと光の筋がたくさん出来て、キラキラ、キラキラ
していた。

黒い夜空に光のキレイな絵の具ですうーっと描かれてゆく。

「すごい！　キレイだなあ。」

「ああ、本当に綺麗だ。」

二人肩を並べて、斜面に広げた毛布に仰向けに寝転び、しばらくの間降り注ぐ星のシャワーを浴びた。

自然と私は強く逞しい腕に抱かれ、さっき包まっていた毛布は、そんな二人を温かく包んでくれていた。

ふと見上げると、祈るように目を閉じていた。

「とっ、智光さん？　大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっとした願い事さ。」

いつもの優しい笑顔で答えてくれた。

私も同じように目を閉じて、たくさんの星たちに願った。

（いつまでも 智光さんと こうやって幸せでいられますように。）

願い事を心の中で言い終える頃、そつと瞼に温かく柔らかな感触を感じた。

しばらく、その素晴らしい天体ショーを寄り添いながら眺めていた。流星群が過ぎた後も、普段街明かりに隠された本当の姿の星空をいつまでも見つめ続けた。

どのくらいの時が過ぎたのかも分からないくらいだった。

私を包む腕の力が緩んだかと思ったら、額に口づけされフワツとした感覚に身体に力が抜けた。

「さて、寒くなってきたし、これからどんどん冷えてくる。そろそろ帰ろう。」

智光さんは、何もなかったかのように上体を起こしてから、周りのものを片付け始めながら話しかけてきた。

一瞬ポカンとしてしまったけど、気持ちを切り替え笑顔で返事をした。

「はい！ じゃあお手伝いしますね。……智光さん。今日はホントにありがとうございました。」

「おや？ ご機嫌だな。それに素直だし。」

何故か不思議そうな顔をしながら言われてしまった。

まあ、いつもはお礼は言いたくても恥ずかしくって、オマケのようにお礼を言うからかな？

もう恥ずかしくない。こんなキレイな星空と一緒に観ようって誘っ

てくれたんだもん。

「だって、本物の流星群は想像していたよりも、もっともっと凄かったんです！ パネルで見た何倍も綺麗だったし♪ それに智光さんと一緒にこんなに綺麗な星空を見られて、とっても幸せな気持ちになったから。」

「ああ、私もこんな風に穏やかな気持ちで流星群をまた見られるなんて思っていなかったし、何より君とこんなに素敵な星空を見られて幸せな気持ちでいっぱいだ。本当にありがとう。」

車に戻ると、初めベンチの方にいた人達は誰もいなくなっていた。ゆっくりと車が走り出すと、だんだん雲行きが怪しくなってきた。さっきまで月と星明りで薄明るかったのに、どんよりとしてきた。ポツリポツリとガラスに当たり始めた。

遠くの方からは低い雷鳴が聞こえてきた。

雨は大粒になり、強くなり、だんだんと雷鳴は近づいてきた。

時折稲妻が光るのが見える。その度にビクッとしてしまう。

雨は激しく叩きつけ、急ぐ車は大きく揺れながら走っていた。

もう目をつぶって下を向いて耐えていた。

すると、急に車が停まった。目を開けるとまだ山道の景色だった。

「大丈夫だ。姫。君には私がついている。決して怖い思いはさせない、だから大丈夫。」

優しく肩を撫でながらそう言ってくれた。

二人のシートを倒し、後ろにあった毛布を一枚手繰り寄せたかと思うと、その毛布で包んでくれた。

毛布に包まった私を大事に大事に抱きかかえて、怖くない様に天気が落ち着くまで優しく優しく撫で続けてくれていた。

第18話：夏の日

高校最後の夏休み。

みんな受験に向けて、夏期講習の予定などがビッチリ入ってる。

ヒロトくんは、部活は引退してもトレーニングは欠かさない。

しかも、サッカーで進学出来るハズなのに、実力で勝負する。って勉強と両立してスゴいなあって感心させられっぱなし。

蓮は、楽器屋さんでバイトしながら、バンド活動に熱心だし。

定期的に地元のライブハウスでライブに出演している。

夏休みの終わり頃には、楽器の大手メーカー主催の学生バンドコンテストにも出場するらしい。

着実に頑張っている結果を出しつつある。

友ちゃんは、相変わらず大学生の彼とラブラブで、同じ大学に通う目標に向かって、受験勉強も頑張れるみたい。

梅雨頃の模試では60%だったから、英語をもう少し頑張ってやれば底上げ出来るハズ。って自己分析にも熱が入ってた。

ユリちゃんは、来年度はウチの学園の姉妹校にあたるニュージューランドの学校に約1年間留学するらしい。

カッコイイなあ。身のこなしや振る舞いは直ぐに馴染めるはず。

英会話も専門の家庭教師がいるだけあって、流暢にこなしているから、単身で留学しても困る事は少ないだろうなあ。

問題は私。

いまだに迷ってる。

色々パターンは考えているけど、決定打的なことがなくて一つに絞

れないまま。

この学年の進路指導の係りは、智光さんだったから良かったものの、他の先生だったら相談にもならない。

とりあえず、7月中に大方の課題は済ませた。

8月頭に、少し遠出して海浜公園と水族館に行った。

朝早く出掛けて、北に向かう。

車中ではやはり進路の事を聞かれた。

ハッキリと決まっていなのは私くらいだったからだろうなあ。

進学希望だったけど、就職希望に変える事を話した。

でも、1学期の内で会社見学や説明会は終わってる。

入社試験も早いところでは希望締め切りが過ぎてしまっている。

進学希望で、志望校を決め悩んでいるところだと思っていたらしい。まさか、進学と就職で悩んでいるとは思っていなかったので、会社探しは大変なんだってという話を永遠と聞かされた。楽しみだったお出かけが半減してしまった気分だったのは言うまでもない。

しかし、どうして今頃変更したのか。何をやりたいのか。など私の考えもキチンと聞いてくれた。

その上で一緒に考えてくれる。って話してくれた。

海浜公園には10時過ぎに着いた。

かなり北に向かったのが車を降りただけで分かる。

頬を過ぎる風が、夏だというのにベトつかずにサラリとしている。

気温もムツとくる感じではなくて、心地よい空気。

しばらく公園内をお散歩した。

時間ごとに吹き出る水の感じが変わる噴水

子供たちは涼をとるためというよりか、ただの水遊びになっている
浅い親水ブース

小さな跳ね橋がかかり、水辺の植物のビオトープ

歩きながら子供の頃の話をした。

だけど、あまり答えてくれない智光さん、楽しい思い出よりも静かに暮らしていたから話すこともないんだ。っと言う。

これからは二人で楽しい思い出をたくさん作っていこうと思う。

海浜公園に併設された水族館に向かった手前で、オープンテラスのあるカフェでランチ。

海からの風を受けながら、二人で食べる軽食は何を食べても美味しく感じた。

ミックスサンドとフルーツジュース。えびピラフと珈琲。

それぞれのセットだったけど、サンドウィッチもピラフも半分ずつにして食べた。

追加でケーキも注文。

チョコレートケーキとミルフィーユ。

智光さんの大きな手では、上手くミルフィーユを食べられなさそうだったから、カットして食べさせてあげた。なんだか可愛かったし、やっとフツの恋人同士になれた気がした。

水族館の中に入ると、ブルーのグラデーションで出来たとっても幻想的な世界だった。

まるで人魚姫のような気分になれるというか、大きな水槽の下に出

来たトンネルをゆっくり歩いてゆくんだけど、海中散歩をしている感じ。

小さな色とりどりの小魚たち。昔読んだ絵本を思い出した。優雅に水の中をヒラヒラと飛んでいるように泳ぐエイ。

ブルーの世界に挿し色を演出する珊瑚礁。

大きな魚たちが勢いよく泳ぎ去ると、小さな泡がたくさんキラキラして、まるで春の流星群のよう。

たくさん歩いて疲れたけど、全然イヤな疲れじゃなくて心地よかった。

帰り際に、お土産やさんによって友ちゃんやユリちゃんにキーホルダーを買った。

その日の帰り道、智光さんのホントのお家、ご実家に寄った。もちろん初めてだし急に決めたので心の準備どころではない状態だった。応接間のような部屋に通され、いつかのお姉さんがお茶の仕度を持って入ってきた。

「いつも頼み事ばかりで不精な弟だわ。」

とお姉さんは言いながらも笑顔を向けてくれた。智光さんは頭を下げ、私が智光さんの代わりにお姉さんのサポート役をする。という話で進めているらしい。

全然話を聞かされないままついてきたから、当人のはずが話が読めていなかったりした。

病床のお父様のところに案内されると、初めてお会いしたのに、な

ぜか親しみのある、とても気さくな素敵なお父様だった。

昔の洋画や文学の話で話が合い、とても楽しい時間だった。

お姉さんとは、紅茶やスイーツの話、ファッション、季節の花々の話で盛り上がり、申し訳ないくらい智光さんそちのけで話し込んでしまった。

趣味も合うけど、勉強やためになる事も多く、充実した時間だった。

今にして思うと、ご実家に連れていかされたのは、智光さんなりに考えがあつての事だったのかな？　なんて思ってしまったりもする。

第19話：紅葉のもと

校庭の木々も葉を散らすもの、色を変えゆくもの、それぞれ。

みんなは受験勉強の合間に文化祭の準備をして、充実した時間だった。

その分、智光さんとはすれ違いの日々が続いた。

例えば、私が準備で買い出しに出ている間に、智光さんは私が帰ったと思って、仕事が終わると帰ってしまったとか。

その逆のような感じもあったし。

校内で二人の事を知るのは、恐らく友ちゃんくらい。

そのくらい注意もしていたから、疎通が上手くいかなかったのは当然だったのかもしれない。

それから、文化祭の事とはいえ、男女一緒になって準備をするのだから、ピッタリ隣に座ったり、会話が多いのは仕方ない。

先生として、智光さんもクラスの女子と作業したり、打ち合わせしたり、買い出しに行くことだって有り得る。

お互いがお互いのそんな光景を遠目に見て、勘違いしたり嫉妬心を抱いたりして、心穏やかにならず言葉に出してしまったら最悪。もう取り返しがつかないかと思った。

今では思い出したくもないくらいで、哀しくなるし、どうしてもっと信じられなかったんだろう。

どうしてもっと真っ直ぐに気持ちを见られなかったんだろう。

どうしてもっと直接話をしなかったんだろう。って想いでいっぱいになる。

一番疑心暗鬼になっていた頃のメールだったと思う。

夜寝る前の電話も少なくなっていたから、私がよくメールを送っていた。

『智光さん、どうしたの。声が聞きたいよ。』
と送れば

『私もいつだって同じ気持ちだ。姫のクラスで授業のない日は特に
つらい。』

つなどとメールか直ぐに電話をくれる時もあったけど、既に眠って
しまっていて翌日にメールがくるってことも少なくなかった。

『智光さん。可愛い子ならいっぱいいるのに、どうして私なの。』
なんて拗ねたりすると

『私にとって、可愛いと思えるのは、姫だけだ。心配するな。』
って返ってきたり。

『私じゃなくても良かったのかもしれないね。』
って言い出すと

『私を困らせないでくれ。姫以外に誰がいるというのだ。』
って返してくる。

あくまでも智光さんは優しい。

だけど、やっぱり疲れていたり、忙しい時期には、私のワガママに
も普段のように優しく応えにくいんだと思う。

悪いことしたなあって後で反省しているんだけど、上手く言葉に出

来なかったり伝わらなかったり。

初めて2週間くらい会話もメールもしなかったかも。

文化祭も終わった後、定期考査があつて、最終日の放課後に準備室に呼ばれた。

————コン。コン。

「姫です。先生、いらっしゃいますか？」

一応廊下だし、いつも通りに言ってみる。

「どうぞ、鍵は空いてるから、入ってきなさい。」

直ぐに、やはりいつも通りに返事が聞こえる。しかも返事と同時に足音も。

私が準備室に入ると、直ぐに扉に鍵をかけられた。

そして、後ろから抱きしめられた。

それは大切に大切に、優しく甘く暖かく包まれた。

「呼び出してすまなかった。急だが、明日のテスト休み、よかったら二人で美術館に出掛けないか。」

久しぶりの優しい声、智光さんと珈琲とタバコの合わさった安心する香りに抱かれながら、ゆっくり一度頷いた。

何故だか嬉しいのに涙が溢れ出して止まらなかった。

そんな私の涙に驚きを隠せず、私の正面にまわると強く強く抱きしめ、大きな優しい手で頭を撫でてくれた。

そう、あなたはいつも私が泣き出すと優しく撫でてくれる。そんなあなたに甘えてばかりでいいのでしょうか？

翌日、ゆっくりスタートで緑の中にある美術館に向かった。

少し標高のある土地柄、グリーンからオレンジ、赤、黄色のグラデーションの木々の間をぬって歩いてゆくと、ぬくもりのある佇まいの美術館が現われる。

こんな風に時間の流れがゆっくりな時を過ごすのは、久しぶりかもしれない。

そして、やや冷たさを含んだ風のおかげか、急に優しく二の腕を引っ張られて、智光さんから腕を組まれた。

いつもは、歩く歩幅も違うし、いつどこで見られるか分からないという気が働いて、手も繋がらないでやや後ろを歩いて、ついて行くカタチだった。

だから、とても驚いたし気恥ずかしかった。

もちろん私に合わせてゆっくり歩いてくれた。

ただ黙って、周りの景色を楽しむように、でも気遣ってくれている感覚が腕から見えない波動が伝わってくる。

「とっ、智光さん。今までごめんなさい。」

2学期に入ってから今までのことを考えると自然に謝っていた。

だけど、真っ直ぐ前を向き、歩む先をこらして見つめながら謝り、話してくれた。

「何を謝っているんだ。何も間違ったことなんか、姫はしていないじゃないか。」

むしろ、謝らねばならないのは私の方だ。すまない。

忙しさを理由に、君との関わりを疎かにしていた。不器用なのも程があるよな。

これからは、もっと気持ちも言葉も大切にして接しなければいけない。と痛感している。」

「そんな。そんなに自分を責めないでください。」

智光さんは、周りに優しくすぎて、自分に厳しすぎるからです。」

「君は、優しいんだな。けど、私は私自身を良く知っているつもりだ。

私のような者は、厳しすぎるくらいでちょうど良いんだ。甘すぎるからな。」

その時も、あの時と同じ物悲しい表情をみせた。

私は、この表情を目にする度に、切なさで胸を締め付けられる想いになる。

その辛い記憶とともに背負っているものを、少しでも助けてあげられないものかとも思う。

第20話：思い出

赤い月

古来不吉だと予言する者もいれば、吉兆の証だと予言する者もいれり。

しかし、あの人ならこう言うはず。

「それは地球が太陽と月の間に位置し、ピッタリと影に入ってしまったから。」

屈折した太陽の光で、波長の長い赤い光だけが届き反射しているからだ。」

だけど私には、それらのどれも正解で、どれも当てはまらない。なぜなら、私にとって月の満ち欠けも色すらも関係がないほど、現在という時が大切で大事だから。

そうこうしている間に松も取れた。

センターに向けて、ヒロトちゃんと友ちゃんはラストスパート。

蓮は相変わらずの毎日を過ごしながらも、今度デモテープを作るんだとか言っていた。

私にはそれが凄い事だとかはよく分からないけど、凄い事らしい。ユリちゃんも、来年度のために語学だけでなく、ニュージールランドの文化や歴史についても勉強をしている。先日も民話の絵本を数冊抱えていた。

私はフツのOLさんになるってみんなには言ってるけど、智光さんのお姉さんのアシスタントとして事務所で働かさせてもらう。そして、会社と智光さんとのパイプ役を担う。

だから、3月下旬になると研修生として1週間通うことになる。

まあ、実質的な社会人としてのスタートが始まる。

みんなの姿を見てみると、何もしないでただ春を待つ自分の時間が勿体無く感じた。

何か出来るはず。今じゃなきゃ出来ない何かが。って。

ある日の放課後、私は地学準備室に向かった。

いつもの様に授業準備のため、授業ノートやプリントなどの作成をしているようだった。

「残り少ない学生生活を、友達とたくさん思い出を作りたい。」
そう宣言のように私は告げた。

担任でもなくなって、進路も決まってっていうより決めてもらったんだけど。

私が3年生になってからは特に、僅かな時間しか会えなかった。だけど、色々考えた結果に決めたから。

キチンと説明して、これからの1ヶ月は友達を優先させてもらおう。たぶん、きっと、分かってくれる。

「あっ、ああ。それはいい事だと思うが、どうしたんだ、急に。」
一瞬驚いた風だったけど、キチンと向き直り聞いてくれた。

「ごめんなさい。」

ここ数週間、ただこのまま時だけが過ぎてゆくのはイヤで、何かしたいんだけど分からなくて。

これからは智光さんとずっと一緒にいられるけど、みんなとはお別れになっちゃうんだなあって思ったら、じっとしていられなくて。とりあえず、ヒロトくんや友ちゃんの受験が終わったらにしようって思ってた。だから、私の中では急でもなくて。」

「なるほど。分かった。君の思うようにやってみなさい。もちろん私の手が必要な時は、いつでも言いなさい。君のためなら、惜しみなく手伝わさせてもらうよ。」

微笑みながらそう言って、私の頭を優しく撫でてくれた。

そして、とりあえずみたいな学年末考査があり、予餞会が催された。翌日から卒業式までは、家庭研修期間っていう1ヶ月強の休みがある。

その間、先ずはみんなでボーリングに行ったり、カラオケに行ったり、遊園地に行ったりした。

3月近くになって、広い自然公園に行ってサイクリングをした。

男子二人は、軽々と周遊してしまう。

私達三人は、周りの草花を見ながらおしゃべりしてゆったりと走る。行く前に、もしかしたら？　って思っていたけど、やっぱりユリちゃんとは自転車を持っていないし、数えるほどしか乗ったことがないらしい。

リゾート地のサイクリングロードで乗ったくらいだから。って涼しい笑顔で言い放った。

まあ、ホントに色々計画して、楽しく充実した時間を過ごした。

一番意表をついて面白かったのは、蓮のライブを観に行った時だと思ふ。

智光さんの車に乗せてもらって5人で観に行った。

ライブハウスに入ると、恐らく智光さんを業界の人と勘違いした近くの人たちがヒソヒソと話をしながらこちらを見て、ペコツと頭を

下げながら道をあけて、前に場所を譲ってくれた事かな。

だって、スーツでライヴは聴きに行かないよね、普通の人は（笑）

週末は智光さんの部屋で過ごすことが多くなった。

特に何って訳でもなく、昼頃訪ねると今週はみんなとどこに行って、こんな風だった。あんな風だった。っと話したり、借りてきたDVを観たり。

天気の良い日には、テラスでオープンカフェっぽくランチやお茶してみたり。

そうそう、テラスにプランターを持ち込んで、派手でない花も咲くハーブを数種類寄せ植えにしてみた。

最初は怪訝そうな顔で見っていたけど、あまりにも殺風景なお部屋だったものだから、テラスにならいいでしょ？ お料理にも使えるし。っと納得させた。

この時だった、不意に思い出したように何かを出してきたかと思うと、顔を赤らめながら小さな封筒を差し出した。

「こういう植物は不慣れで、枯らしてしまったら困るので、時々世話をしに来てくれないか。」

そう言われて、小さな封筒の中身を確認すると大きめな鍵が入っていた。

それを握りしめて見上げる私に、照れた笑みを浮かべながら教えてくれた。

「ここの部屋の鍵だ。持っていて欲しい。本当は卒業と同時に渡そうと用意したんだが、少し早いがこの植物達にとっても、今渡した方がいいと思ってな。」

「分かりました。時々様子を見に来ますね。智光さんとハーブの様子をね。」

嬉しさに涙が出そうだったけど、ふざけた返事をしてごまかした。

第21話：白木蓮

智光さんと出逢って2度目の春。

私は高校を卒業する。どんなにこの日を待ち望んでいただろう。

だけど、この淋しさは何。不思議な恐怖感は一切なんだというの。あの人に尋ねたら教えてくれるだろうか。

そして、この淋しさも恐怖感も拭い去ってくれるのかしら、いつものように頭を撫でながら「大丈夫だよ。」と囁きながら。

卒業式を終えて、最初の週末。

ガラス越しの柔らかな陽射し。扉を開ければ心地よい外気、肌を過ぎる風は春を感じさせる。

そして私は待つ、あの人が来るのを。

庭の草花も咲き競うことを急ぐように蕾をあちらこちらでつけ始めでは、明日を楽しみにさせてくれる。

いよいよ、その時がきたつという感じ。

今まさに私が向かう部屋では小さな炎が灯されたことだろう。

そして、お茶を持って、二人が待つ静かな客間の脇に立つ。

「智光さん、いらっしやい。」

それぞれにお茶を出し、当たり前のようにちよこんと座った。

恐らく、私の知っている中のどれにも当てはまらないほど緊張した面持ちで座っているこの人の隣に。

三人とも黙ったままの僅かな時を、急かすように庭の小鳥がさえずる。

「私の全てをかけて必ず幸せにします。姫さんと結婚させてください。」

目を瞑ったまま一言、しっかりとした口調で。

それからまたしばしの沈黙となったものの
やはりまたも口火を切ったのは彼だった。

座っていた座布団を脇に除けたかと思うと、改めて正座しなおして
一気に出逢った時から誓いの言葉まで語りだした。

「姫さんとは、今年の春に転校してきてクラス担任をさせていただきましたご縁で知り合いました。」

その年の冬に、お互いの気持ちを確認し、理解し、お付き合いを始めた
めさせていただきました。

もちろん、教師と生徒という関係上、他言も出来ず、普段はよそよそしいやり取りになってしまいう状況に、この一年余りの間に心を痛めていた日々も少なくなかったと認識しております。

しかし、これからは私自身をかけまして、姫さんを守り幸せにする
と誓います。そして、二人でつくる未来を明るく豊かで確実なものにしたいと思っております。」

そこまで話すと、目の前にあるいつもは苦手だというお茶をクイツ
と飲み干し、今度は自身の事について語り始めた。

「私は、教員になってから今月末で丸9年になります。

生まれ育ったのは蔵前の家ですが、母を早くに亡くし、2つ違いの
姉と雇いの者達に育てられたような男です。

ですから、温かい家庭というものに乏しく、大らかで優しい彼女に
惹かれましたし、彼女とならば私の憧れる未来と一緒に築き、歩んで
ゆけると確信いたしました。

今まで不器用な生き方しか出来なかった私ですが、幼少期に母と死別したというショックから、人々がどんなに幸せでも、悲しみに暮れていても、風雨が降り続くのが日照りであろうが、その先には常に光り輝く星空が存在する。その神秘に心奪われていました。

そして、幼い時からの読書量は誰にも引けを取らないくらいでしたから、天文の道に進もうと志したのには時間は掛かりませんでした。多分小学生の高学年の時は既に心に決めていたかと思います。

初めのうちは、周りの者たちもよく思ってくれておりましたが、私が大学に入学して教員を目指す決意を口にした頃から変わってきました。

よって、大学在学中の後半頃から、一人暮らしをしているしだいです。

ですが、私には捨てきれない想いと信念があったのです。

人間の身近にある存在でありながら、知識として馴染みが薄いこの学問を、天文学とは素晴らしい学問なのだという事実を、若い世代の子供達に楽しみとともに教えたい。伝えてゆきたい。

これから成長して、幸せを感じる時も行き詰まった時も、空を見上げて変わらぬ美しさを目にして、生きる力として欲しい。その僅かながらでも役に立ち、巣立って欲しいと願っているのです。

いつまでも私一人のワガママが通るとは思ってはおりません。

そして、父が築き創り上げてきたものは素晴らしく立派な事だと思います。

がしかし、私が後継者として、そのまま携えてただ時を過ごしてゆくだけなのはイヤなのです。

いずれは長男としての筋は、通さねばなりませんかね。

これからお話しすることは、父にも姉にも、もちろん姫さんにも話したことのない、ずっと私の心の中に抱えて口にする事のなかったことですが、いつか私が蔵前の家に戻ることがあるならば、それは教員という職業に満足しきった時か、蔵前の家を支える男子がいなくなつた時でしょう。」

ただ黙って聞いてくれていた父も私も、目を見開き、息をのんでしまった瞬間でした。

一呼吸おくと、話を進めました。

「しかし、どちらにせよ今すぐということにはなりません。

父は、姉と私を育て上げると、病床に臥してしまいましたが、まだ戻るつもりはありません。

戻る時ではないからです。

そんなことを言っている男の元へ姫さんを嫁がせたくない。という親御さんの心中も察します。

しかもそんな風にしていて、いざ蔵前の家に戻った時に采配を振ることが出来るのか。という疑問もありでしょう。

現に私自身も、やっていく自信が100%でなく、心配と不安は消し去ることは出来ません。

でも、何もしないでいることの方がそれは募るばかりです。

ですから、父が倒れてからは姉がグループのまとめ役として動いてくれていますし、逐次情報交換もし、状況把握もしているつもりです。」

そこで話が途切れたかと思うと、過呼吸のような症状で呼吸を荒くし、苦しそうになり、私の方に傾いてきた。

とっさに両手を広げて抱きかかえるように支えたつもりでいた。

けれど、150cm程度の私が180cmあまりの彼をいつまでも

支えきれぬわけもなく、倒れこむかと思ったら、父が二人ともガツチリと支えてくれた。

隣室で声を聞きつけた母が部屋に入ってくるなり、テーブルを寄せ、布団の用意を手早くしてくれた。

私はただただ目の前の状況に驚くあまり、涙が止まらなかった。たった今私の事をどんなにか愛してくれているか誓い、未来を語ってくれたこの人と離ればなれになってしまうのではないかという恐怖感に震え、この世の全てのものに祈りに祈った。

『どうか、どうか智光さんを助けてください。お願いします。』

母はそんな私の背中をさすりながら話してくれた。

「大丈夫よ。極度の緊張で呼吸が少なくなり、気を失っているだけだから。

このまましばらく安静に眠らせてあげなさい。

それより、目を覚ました時にあなたのその顔を見たらどう思うかしら。

分かったら、今あなたは何を思い、どうしたらいいかが分かるはずよ。」

私は直ぐに自分の部屋に行き、あのオルゴールを手にして客間へ戻った。

どれくらいの時が過ぎたのだろう。日差しが客間に真っ直ぐに入っていたのが、障子戸の影が斜めに長く伸びている。

開け放たれた部屋は、庭の白木蓮の香りで満たされている。

私は、あなたがいつ目を覚ましてもいいように、あなたの未来を明

るくするために、いつまでも微笑を絶やさないでいよう。

第22話：友情（前書き）

今回は女の子3人のお話。ユリちゃんにも話すシーンです。で、ユリちゃんの反応は？

第22話..友情

卒業式の2日後。

友ちゃんとユリちゃんと会った。

みんな生活がバラバラになる前に「女3人だけのパーティーをしよう！」っていうことだった。

決して“さよならパーティー”とは呼びたくなかった。

先ずは、午前中の空いた映画館。

洋画のちよつとアクションも入ったファンタジー映画を観た。

非現実的な空間で、同じ感動を体験したっていうのは、結束を固くさせる気がする。

物語の中の「男の友情」とかいけど、「女の友情」だって同じくらい強く固い時だってあると思う。

そんな風に心の隅で思いながら劇場を後にした。

大型ショッピングモールをブラブラとした。

って言っても早くも春物セールをやってて、誘惑がいっぱい。

あれもこれもと買わないようにするのがツラかった。

アジアン料理のお店でランチにした。

バイキングスタイルで、ちよつと和風っぽいメニューで美味しかった。

半個室。って感じで、ボックス席の囲いが明るい色の壁。通路側だけオープンになっている。

だけど、小さなのれんが垂れ下がっていて、ホントに一つ一つのお部屋みたい。

お互いのをつついたり、これは辛いね。とか、これは美味しい。と

か話して、デザートも何種類ものせてたっぷり食べた。
美味しいものをたくさん食べると、なぜかとても幸せな気分になる。

たっぷり食べて、最後にお茶でも飲んで出発しよう。ってことになった。

ドリンクバーで、ルイボスティーを注いだ。

一瞬3人とも無言になった。

それぞれがそれぞれのグラスやカップを見つめたまま。

私は今しかないかも。っと思い、口を開いた。

「あのね。私。二人に、話さなきゃいけないことがあるの。」
友ちゃんとユリちゃんが同時に私のほうを向いた。

「私。センセと付き合ってるの。ごめんなさい、黙ってて。」

もちろん友ちゃんは知っていたから、黙ったまま優しく微笑んで私の頭を撫でてくれた。

ユリちゃんには、ホントにずっと隠していたから、申し訳ない気持ちでいっぱいだったけど、驚いた様子もなくニコツと笑ってゆっくり話してくれた。

「姫さん。そんな事でしたの。改まって話し出しましたから、もっと凄い事かと思いましたわ。私。そんな事でしたら、随分前からお付き合いなさってるのかしら？　っと思っていましたわ。」

「ユリちゃん。どうして？　そうだと。」

私のほうが驚いて聞き返してしまった。

「だって、姫さん急に進学から就職にお替えになったでしょ？　しかもお勤め先は”プリンセス企画”って教えてくださったし。」

第23話：ハードワーカー

卒業して、智光さんが父に二人のことを話して、ちゃんと認めてもらい、これからは幸せな日々が続くと思っていた。

週末、土日のどちらかは智光さんの家で過ごすというスタイルが続いた。

私たちの学年が卒業して、新1年生の副担任をするようになったらしい。

そして、僅かながらの人数であった天文部に新入生が6名も入ってきて、いきなり倍の人数になったと喜んでいた。

その代わり、土曜日の午後は天文部内で講座めいた事を時々しているの、帰りが遅い。

それは仕方のない事。

だけど、本音は寂しい。

仕事だと分かっている、今までのように同じ敷地の同じ建物にいるんだ。っていう、よく分からない理屈で我慢出来た。

でも今は違う。

同じ空気も感じられないほど、環境が違う中で生きている。

まあ、私の方もお姉さんの事務所で、アシスタントとしてはまだまだだけど、蔵前グループの歴史や経営理念など、様々なことを学んで、お手伝いもしている。

ハッキリ言って、奥が深い。

数学の公式に当て嵌めて問題を解いている方が、単純明解でスッキリと解ける。

一週間もあっという間に過ぎてしまうほど、一日一日過ぎてゆく

が早くて、季節感など忘れてしまうくらい。

気が付けば、衣更えも間近だったり：蟬の声が聞こえてきたり：ふと立ち止まって空を見ることもなかったかもしれない。

そう、好きな紫陽花が頭を垂れて珠のような花を、自身の全体を覆いつくすように咲き誇っている様を今年は見逃していた。

智光さんは、夏休みに入った。

もちろん、夏休みだからといってずっと家にいる訳でなく、遅めのスタートで学校へ行き、早く帰宅する。っていう毎日らしいけど。私も少しは事務所の生活に慣れてきて、ペースも掴めてきた。っと自分では思っているつもり。

だから、長期休暇で家にいる時間が多くなった智光さんと、少しでも長く一緒にいたいから、食事を作りに通うようになった。

週末は仕事は抜きにして、今までできなかったフツのデート(?)を楽しんだ。

遊園地に行ったり、デパートでお買い物したり、公園の木陰でランチしたり。

オープンカフェでお茶したって全然平気。

映画館でだって、暗い館内を手を繋いで歩いても気にしなくてもいい。

フツの恋人同士なら、きつとなんでもない週末が私には幸せだった。

蒸し暑さは変わらず、しかし夜になると鳴く虫の音が変わり始めた頃からかな。

2学期に入って智光さんは、何だか今までとは違う。

普段は何も変わらないはずなのに、仕事をしている時は特に違う。

春頃は、書齋に籠る時は私はラグで雑誌をみたり、智光さんの書棚から借りた本を読んだり、同じ部屋で静かに過ごす分には何も言わなかった。

でも最近は、私が食事の支度をしている間に集中してこなしているように「ご飯出来ましたよ。」って1度呼んだくらいでは気付かない。3回くらいでようやく気付くって感じ。

あまりに根をつめすぎて、体調を崩さなければいいんだけど。っと心配だったりする。

この頃の私の仕事はというと。

2週間に1度、おじ様のお見舞いに行つて、お花を活けたりお喋りして帰ってくる。

あとは、この1週間の各部門の動きと翌週の主な予定をまとめる。

月頭には、先月の進捗状況とデータ。今月の目標と主な予定もまとめる。

また、月の中旬には各部門の現場を聡子さん（あっお姉様の名前ね）と共に視察して、現場の方々と意見交換会。

各部からの意見をまとめて、実行可能か否か一部対応可能などに分けて、一覧にする。

最終的に出来上がったものは、聡子さんと智光さんに提出。

その提出は毎回ドキドキする。

内容や文章構成、誤字脱字、あらゆる部分で緊張してドキドキする。いくらデータを纏めるだけとは言えども、簡潔に分かりやすく纏めなければならぬ。

今までは、現在やっている仕事のほかにコレを聡子さん一人ではばこなしていたのだから、頭が下がる。

智光さんも、学校のお仕事の他に私が持参した資料やデータに目を通し、分析したりした意見をまとめて私に渡してくれる。それを月

曜日に私が事務所に持ってゆく。
そうだよ、私みたいにゴロゴロしてられないよね。っと分かっていても寂しい。

秋の彼岸過ぎの風によって、金木犀の香りが街全体を包んでいる
みたいだった。

それは地学準備室にも……
彼の帰りを待つ彼女の部屋にも……

金曜日は、定時で仕事をあがって買い物に行くのが習慣になっていた。

その日、夕食の仕込みを終える頃、テーブルに置いておいたピンク色のケータイが鳴った。

着信音と画面の文字から、上司であり智光さんのお姉様の聡子さんからだとすぐに分かった。

もしかして、今日の仕事で間違いでもしてしまったかな。っと思い
急いで電話に出た。

「はい。滝澤です。……えっ！ 本当ですか？ はい。 はい。
307ですね。 分かりました。」

驚きと事の大事さに一瞬目の前が真っ白になった。

とりあえず椅子に座り深呼吸を3回くらいした。

一つ一つ自分の中で確認するように頷きながらメモった。

場所や部屋番号。

必要なもの。これは些細なものまで全て数と共に記入していった。

それらを書き終えると、メモを片手に各部屋から色々な物を大きな

カバンに詰めていき、確認した。
確認したその大きなカバンと自分のバッグを掴むと、急いで部屋を出発した。

息を切らしながら辿り着いたのは、街の総合病院。

小さな身体に大きなカバンを持って廊下をウロウロとして『307』を見つけ辿り着いた。

扉の前で左手の甲で両頬をぬぐい、そのあと深呼吸を3回もした。

「失礼します。」

小さな声で一言かけながら扉をゆっくりスライドさせて入っていた。

先ず視線を扉に近いほうへむけてみた。

ベッドは空いていた。

ゆっくり視線を窓際の方へ移すと、静かな寝息を立てて彼が眠っていた。

そーっと近づいて、音を立てないように丸イスへ腰掛けた。

慌てて来て呼吸が速くなっていたけど、やっと落ち着いたくらいに看護師が検温のため部屋に入ってきた。

看護師から、運ばれてきた時の状況やこれからの治療など教えてもらっていた。

静かでも、そんな二人のやり取りに、彼は目を覚ました。

看護師は検温と手際よく脈拍や血液中の酸素など測って、また次の部屋へと回るために出ていった。

静かな病室で見つめ合う。

「姫。すまない。」

横になったまま、眼を細めながら真っ直ぐ姫の瞳を見つめて一言謝った。

「いいの、謝らないでいいの。」

彼女の家で倒れた時のように、聖母の様な柔らかな笑みを浮かべながら言った。

しかし、今度はまるで幼稚園の保母さんか、小さい子をしつける母親のような口ぶりで話した。

「さっき聞いたけど、ストレスと疲労、それから過度な喫煙からだって言ってたわよ。」

これからは無理はしないでくださいね。それと本数減らしましょうね。

そうしないと、血い吐いて倒れるどころじゃ済まなくなっちゃいますよ！ 分かりますか？

そうならない為にも私は智光さんの傍にいて、お姉様のもとでも頑張ってるんじゃないですか。

って今日のところはゆっくり休養とる事だけ考えてね。」

「ああ、分かっている。」

本当に分かっているのか、いないのか。私には分からないけど、今はただ大人しくしてくれている彼を看病するしか、私には出来ない。時期的に文化祭前だから、クラスの準備と天文部の準備。それから授業準備や事務仕事して頑張りが過ぎた。ってパターンかな。

「姫、君には感謝している。これからは身も心も強い人間にならな

ければな。

そうならなければ、君をいつになっても守れない不甲斐ない男のまだ。」

私自身、こんなにも大切にしてもらっていて、もう頑張り過ぎないで。って言ってあげたかった。

けど今は、黙ってうなずいて、彼の言葉と気持ちを受け止めることが一番だと思った。

「そしてここしばらくは、君と歩く未来を思い描きながら、一日も早く一緒に暮らせることを願って休養をとることにするよ。」

「そうね、それが一番の休養の仕方かもしれないわね。」

さすがに私まで照れ臭くなって、こんなふうに肯定して、小さく笑うしかなかった。

やや冷たくなった風が吹いて、パラパラと金木犀の花を散らす。道行く人はオレンジ色の縁取りをした路地を足早に急ぐ。

誰にも気付かれない痩せ細った上限の月が細く輝いていた。

最終話：祝福

智光さんは、1週間ほどの入院後、1ヶ月の自宅療養を経て、ゆっくりと通常の生活へと戻っていった。

本人的には、無理はしていないよ。って言ってるけど心配。

「今までに比べたら仕事量も格段に減らしている。

しかも、大きく変わった事がある。

一日一日、自分に関わる全ての事を考えて、計画し、行動するようになった。

入院して、一度ニュートラルに身をおくことで、色々とじっくり考える時間がとれて、イイきっかけになった気がする。」

「また、そんなふうに言っても他の人より倍は仕事しているように見えるんだけどなあ。」

ポカポカと初冬の陽ざしが柔らかく入ってくる彼の部屋。
雑誌を広げながらくつろいでいる私。

「でも、信じるわ。智光さんが好きだからっ。」

珈琲をいれながら、少し照れてチラッと私の方を見た。

実際10以上歳が離れているのに、こんなふうに照れた顔が可愛い。って思ってしまう。

だからたまに、今みたいになざと言ってみたりする。

雑誌にまた目を落とすと、パラパラとページをめくり話を続けた。

「智光さんは、真っ黒よりもシルバーグレーに黒の差し色がある方が似合うと思うなあ。」

「君の選んだものなら何でも喜んで着るよ。さあ珈琲が入ったよ。」

テーブルの中ほどにいつものペアマグカップを並べて置いた。

そんな彼を見上げるようにニコリと笑って、見ていたページを彼が見えるように広げて見せた。

そこには、キレイというより、可愛くて華のあるタイプのモデルさんが、純白のふんわりとしたドレスをまとうて見開きの中央から、私たちに微笑みかけていた。

微笑む彼女を囲むように、黒一色や逆に白一色、シルバーグレーに漆黒の襟など、色もデザインも様々なタキシード姿のモデルさんが載っていた。

私は、彼女の右手とさり気なく繋いだ男性が着ているタキシードを軽く指差してみた。

暦は流れるように過ぎ去った。卒業して2度目の、シリウス・ポルクス・リゲルを含む寒空のダイヤモンドが見られる季節になった。

気の早い街並は、赤と緑を中心とする彩り華やかなイルミネーションで、夜でも明るいくらい。

鈴の音色のBGM効果もあって、みんな心落ち着かずっていう感じ。

土曜の夜。

智光さんのブレンド「イザナギ」もメニューにあるいつものカフェを貸し切って、私達のために賑やかなパーティーを開いてくれた。久しぶりのメンバーが集まって、飲んで食べて笑って……

蓮やヒロトくん、友ちゃん、ユリちゃん。ほとんど高校2年生の時の同窓会状態になっている。

私の隣には智光さんもいるし。うん。やっぱり2年次のクラスの顔

ばかりだわ。

「姫ちゃん。おめでとう。」

一時はどうなるかと思っただけだけど、やっとここまで来たって感じだわね。良かったね。

今日は思いつき楽しんでいったね。」

「ありがとう。ホントに友ちゃんには感謝してる。

今日のパーティーだって、いつの間に！？　って思ったもの。ホントにありがとう。

私、あの春休みに、美術館で友ちゃんに見つかってなかったら、きっと今の私とは違っていたと思う。」

ホントに感謝してる。ツライ時も嬉しかった時も淋しかった時も、いつも優しく見守って話を聞いてくれた。

「そんなあ。あの時はビックリしたけど、まさか蔵前先生だったとは全然気付かなかったわ。

本当に前髪下ろしてると感じが変わるし、何より姫ちゃんと一緒にだから、だんだん若返っていったるんじゃないのかな。来週は楽しみにしてるからね。」

「もう、友ちゃんったら／＼／＼　でも、来週は蔵前の叔父様が主催するって名目のグループとしてのお披露目会って感じだから、会社関係の来賓ばかりで披露宴って呼べるフツートの式とは違うのよね。ごめんね。」

「その会社関係の来賓に、父も含まれているけどね。でしょ？　姫さん。

まあ良かったわ、帰国が間に合って。おめでとう、必ず幸せになり

なさいね。

これからは奥様として、色々と学ばなくてはいけない事がたくさんあるものね。頑張っておやりなさい。」

友ちゃんの後ろから、一際大人な服装のユリちゃんが大きな花束とともに顔を出した。

花束もおののくであろうスレンダーなボディとセクシーなドレスに圧倒されて、あんぐりと口が開いたままになってしまいそうだった。

「あつ、ありがとう、ユリちゃん。

それから、お帰りなさい。

でも奥様は未だ一週間早いよお／＼／＼

これからは、社交的な事はユリちゃんにも教えてもらわないとだわあ。お願いね。」

結局一年半くらいニュージーランドで勉強して帰国したばかりのユリちゃんだけど、スタイルも風貌も、更に磨きがかかった様に見える。

テーブルの下で私の右手をそっと握りしめられた。

あったかくて、大きくて、ちよつとゴツゴツとした、だけど優しい智光さんの左手。

今でも未だにドキドキしている私。

こんなに近くに居られるのに、横顔を見上げるように見つめてみる。太めのデザインフレームの眼鏡、耳へと伸びるフレームからチラリと覗く瞳。レンズ越しではない彼のそれはドキドキを助長させる。

蓮やヒロトくん、拓海先輩に囲まれて質問攻めにあっている智光さんは、かつての先生の顔でなく一人の男性の顔になって、ほころびっぱなしだったりする。

こんなに穏やかな気持ちで、気のあう友達と過ごす素敵な時間。

2年前までは心苦しくもナイショにしていた関係だから、久しぶりのようだけど、初めてなんだと改めて実感した。

談笑する横顔をあまりにもいつまでも見つめていたら、視線を感じたのだろう。

ゆっくり瞬きをしたかと思うと、振り向くように私の方へ視線を下ろす。

優しい眼差しで「どうした？　大丈夫かい？」とでも話しかけてくれているように。

私もゆっくり瞬きをして「貴方がいるから大丈夫よ。」っと気持ちを込めて、右手をギュッと握りしめた。

真っ赤なカメラアが、常緑の木を飾り立てるのを競うかのように咲き急いでいる。

二人を祝福するために白いエルフたちがやってきた、今年一番の冷え込みと言っていた街を銀世界に着替えさせた。

最終話：祝福（後書き）

未熟な書き手の私の拙い文章に長い間、ホントに長い間、姫サイドのお話にお付き合いいただきありがとうございます。

読んでくださる皆様のおかげで、今回でやっと最終回を迎えることができました。

最終回を迎えても、この二人は素敵な幸せを掴み、明るい未来を過ごせると思います。

そして、読んでくださっている皆様にも明るい未来が訪れることを願って……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833k/>

ハツコイ ～姫 SIDE～

2010年10月8日14時15分発行